

Ⅲ 研究実践報告

(1) 仙台市立荒町小学校(平成25・26年度実践指定校)

かかわり合って学ぶ児童の育成

I はじめに

本校では「かかわり」を研究の重要なテーマとして位置づけ、授業の改善に取り組んできた。昨年度から研究教科を「総合的な学習の時間」とし、今年度はその2年目にあたる。

昨年度の実践を通して、児童の課題として次のような点があげられた。「課題を設定できない(問いを持ってない)」「相手に伝える意識が薄い」などである。また、NIEの取り組みとしても、児童の周囲に対する興味や問い意識の低さが課題として挙げられている。

そこで、今年度のNIEの研究のポイントとして、「記事の内容に関心を持つ(問いを持つ)」、「相手を意識した資料や新聞作りをする」の2つを意識しながら、取り組みを進めることにした。

II 昨年度の取り組み

以下の2つを中心に取り組みを進めた。

- ・「新聞に触れることで社会や地域に対する関心を深め、物事に対して意欲的な姿勢を身に付けさせること」
- ・「新聞づくりの手法や、取材の視点などを教科の学習に生かすこと」

1 環境面の整備

(1) NIEコーナーの設置

1階フロアの中央スペースにNIEコーナーを設置し、掲示板と大きめの机を用意した。



(2) 職員研修

NIEについて職員が共通認識のもとに取り組みを進められるよう、NIE事務局長の佐藤理絵

さん、コーディネーターの齋藤昭雄さんをお招きして研修会を行った。

2 日常における活動

高学年では、朝の会で題材をニュースに絞ってスピーチを行った。また、記事のスクラップにも取り組んだ。新聞に触れる機会が増えたことで、記事やニュースに対して興味を持つようになってきた。

3 各教科での取り組み

(1) 4年生の実践「社会」

単元ごとに学習のまとめを新聞形式で行った。新聞形式でのまとめを意識して学習に臨むことで、自分なりに学習のポイントをつかむことができるようになった。さらに、自主学習などで学習のポイントをまとめることにも良い影響が見られた。

(2) 5年生の実践「国語」

「新聞記事を読み比べよう」では、河北新報社の方をお招きし、新聞記事の書き方や構成について教えていただいた。

さらに、スポーツや災害など1面が同じ記事の時に、それぞれを比較することで、作成する側の伝えたい内容を考える学習にも取り組んだ。

(3) 6年生の実践

6年生では、修学旅行をはさんで2回の出前授業を行った。1回目は、新聞記事の書き方や取材の仕方を教えていただき、旅行後、各自新聞を作成した。2回目に、新聞に対して講評をいただくことで、より学習を深めることができた。

Ⅲ 今年度の取り組み

1 実践のねらい

今年度も本校では「総合的な学習の時間」を研究教科としており、活動の中でNIEを取り入れることにした。そのため、主な取り組みは中・高学年が中心となった。

日々のスピーチや新聞記事を紹介する常時活動

は、学年の実態に応じて取り組むこととした。

2 各学年の取り組み

1年生

【授業実践】

生活科

新聞記事の見出しを参考にして、行事や生活科で活動したことをカードにまとめた。見出し（タイトル）を意識させるために、短く上手に表現しているものを紹介するようにした。初めは要領を得なかったが、繰り返すことで、見出しを工夫するようになってきた。



文字を読める楽しさからエコ新聞を喜んで読んでいた。ふりがながふってあり、身近な記事を紹介するには良かった。しかし、一般紙になると、絵や写真で興味を引きつけることはできるが、言葉の言い回しが難しく、どのように説明するかが課題である。

2年生

【授業実践】

道徳「いじめについて考えよう」

ふだん、谷川俊太郎さんの詩に触れさせているので、道徳の授業で（2回）、朝日小学生新聞の「いじめの詩」をとりあげた。谷川さんの詩ということもあり、子どもたちは興味を示していた。また、紙面には小学生の作品もあっており、より身近な問題としていじめについて考えることができた。

生活科「動物園に行こう」

動物を観察し、その様子を新聞形式でまとめた。子どもたちなりに動物の様子が分かるような見出しを考えていた。記事を意識させるために、日時を表す言葉から書くようにさせた。



3年生

【日常における活動】

朝の会のスピーチで、新聞で気になった記事を紹介させた。3年生には難しい言葉が多いものの、家庭で記事を切り抜いてきたり、NIEコーナーで探したりしていた。継続することで、世の中の出来事に興味を持つようになり、担任の説明に対する反応も良くなってきている。3年生という発達段階を考えると、写真を提示するだけでも十分な効果があるように思われる。



〔スピーチの記事探し〕

【授業実践】

総合的な学習の時間「大豆」

大豆をテーマに、育てるところから始め、料理作りにも取り組んだ。学習で学んだことを新聞形式でまとめた。記事を書く際には、見出しを工夫するように声掛けをした。



4年生

【授業実践】

国語「新聞を書こう」

国語で学習したことをもとに、社会科の見学の様子を新聞でまとめさせた。子どもたちは喜んで取り組み、見出しを考えたりグラフを入れたりしながら、見やすくなるように工夫していた。

新聞という形をとることで、子どもたちは相手を意識して文章を書くようになることが分かった。



5年生

【日常における活動】

朝の会のスピーチ

日直が輪番で行う。最近の気になったニュースを選び、①要約②感想の2点をワークシートに記入し、記事を貼って発表し、ファイルに蓄積している。

【授業実践】

国語「新聞記事を読み比べよう」

河北新報の桜田さんに来ていただき、新聞の特徴や編集の仕方、記事の書き方などについて教えていただいた。



学習の発展として、教えていただいたことを参考にして、児童一人一人が新聞記事を書いた。記事の見出しは次の通りである。

「選挙権について」 「増え続ける消費税」
「日本のすごい技術」 「進化していく遊び」
「世界の給食のひみつ」 「音が出るしくみ」
「今年ヒットしたわけ」 「走ることの楽しさ」
「古くから伝わる仙台みそ」
「台風はどうやって発生するの」
「秋保大滝の自然を取りもどせ」
「野良犬はどこで生きのびていくのか」など。

児童が、今、最も関心のあることをテーマに選ぶことで、楽しく記事を書き進めることができた。

手立てとして、記事は、①事実等の最も伝えたいことを先に書き、②次に、友達や家族、親しい人への具体的なインタビューの内容を載せ、③最後に自分の意見を書くという手順を決めて書かせるようにした。児童は、より相手に伝わる内容の紙面づくりを工夫することができた。

最後に、学級で一冊の新聞ができあがり、人数分を印刷し、配布した。A4サイズ（上下に2名分を縮小して掲載）20ページとなり、手に取った感触で、児童は満足感にあふれる表情であった。

このような活動を通し、児童は新聞記事を書く

喜びを体感し、お互いに楽しく読み合う楽しさを味わうことができた。実際の新聞のように、社会、産業、教育、文化、スポーツ面など、話題を分野別に構成することで、内容豊富な新聞をみんなの力でつくったという達成感も味わわせることができた。

今後は、総合的な学習のまとめ（テーマ「仙台の歴史、荒町の歴史」）についても、同様に新聞形式で行おうと考えている。



〔学級新聞〕



〔みんなで一冊の新聞に〕

考察

- 写真や図（統計やデータを含む）を使って、自分の意見をまとめることができる。
- タイムリーな事項について、学習に取り入れることができる。
- 結論→取材→自分の考えという記事の構成を学ぶことができた。
- △学習に必要な記事が、その時に見つかるとは限らない。必要な記事を集めたい場合、ある程度の期間が必要である。
- △学年に応じてではあるが、大人を対象とした記事であるために、児童が扱うには教師の補足が必要である。難しい言葉や漢字があり、スピーチで取り上げた児童には、記事内容の補足説明が必要であった。

6年生

【日常における活動】

朝の会のスピーチ

日直が輪番で行う。最近気になったニュースの内容と、それについて感想を述べる。

記事のスクラップ

気になった記事を切り取り、感想をまとめる。



【授業実践】

総合「修学旅行新聞」

河北新報の桜田さんに出前授業で2回来ていただいた。1回目は、「記事の構成とインタビューの仕方」、2回目は修学旅行直後に「記事の構成、前文やインタビュー記事の書き方」について詳しく教えていただいた。

修学旅行の自主研修はあいにくの雨で、観光客や市内の人々と接する機会は限られたものの、お店の人にお話をうかがったり、友達に感想を聞いたりして記事を書き上げることができた。



国語「新聞の投書を読み比べよう」

教科書で投書について学習したあと、実際の投書を紹介しながら、感想を交流した。また、朝日新聞の「若い世代」の投書も適宜紹介するようにしている。社会の出来事に関する意見や同年代の意見文は、子どもたちにとっても、身近なものとしてとらえることができたようである。特にスマホに関する投書には共感したようで、学校文集で、スマホを取り上げる児童も見られた。

「未来に生かす自然のエネルギー」という



単元では、教科書で風力発電の良さを理解するが、風車の破損事故が問題になっている記事を伝えると、子どもたちの認識はだいぶ変わったようである。物事を一面でとらえるのではなく、「問い」を持ちながら物事に向かい合うことの重要性について考えさせたいと思いながら実践を進めた。

総合「環境について考えよう」

野口健さんの富士山清掃についての記事を取り上げた。まず、記事の写真だけを提示し、気付いたことを発表させた。次に、記事についての「なぜ？」を考えさせた。子どもたちに、記事の内容をそのまま伝えたと「そうなんだ」で終わってしまう。そこで、「なぜ?」「どうして?」と考えさせる場を設定した。子どもたちは、富士山が世界遺産に登録された経緯については知っており、「汚れがひどいから自然遺産にはならなかった」ことを知っている子もいる。しかし、実際に資料としてゴミの量を伝えると、驚きを感じたようである。

総合「自分の将来について考えよう」

6年生の総合では、2学期に「自分づくり」に取り組んだ。働くことの意義や生き方について、職場体験などを通して考えさせた。その際、考える材料の一つとして、人に関する記事を掲示した。子どもたちの活動として、定期的に切り抜くことになっている。有名な人から身近な人まで掲示していくことで、人に興味を持つようになった。



【人物紹介コーナー】

特別支援学級

【日常における活動】

朝の会で時間に余裕のある時に、1階のNIEコーナーに立ち寄り、新聞を読んで（見て）いる。テレビで見た内容と同じニュースに興味を示す様子が見られ、担任もテレビと新聞がつながるように声掛けをしている。

【授業実践】

買い物学習「ぴったりの金額を出そう！」

新聞広告を見て、品物の代金を払う学習に取り組んだ。子どもたちは、広告のカラー写真に興味を示し、どの品物を選ぶかと楽しみながら取り組んでいた。間違えてもやり直ししながら、じっくりと学習を進め、子どもの実態を踏まえて、金額を多めに出すことにも取り組ませている。

また、活動の様子を実物投影機でテレビに映すことで、友達の選んだものが分かり、「自分は何にしようかな」と、みんなで一緒に学習することができるようにした。



【品物のお金を払おう】



【テレビに写して】

図工「切って貼って」

気に入った広告を切って、コラージュに取り組んだ。子どもたちは気に入った広告を探そうと、楽しそうに取り組んでいた。

IV 実践を振り返って

1 児童の様子

(1) 新聞の活用

上学年では、実際に新聞を提示することで、興味を示す児童が多く見られた。また、新聞記事にどのようなことが書かれているのか、自分なりに読み取ろうとする姿も見られた。

新聞の投書は、導入へのきっかけや話題を深めることには有効であった。新聞記事に比べると文

章が分かりやすく、共感したり、違う意見を持ったりしやすいようである。

(2) 新聞づくり

中学年から、学習や活動のまとめとして、新聞づくりに取り組んでいるが、実際に新聞の良さを感じさせることで、見出しやレイアウトへの工夫が見られるようになった。一人称の作文ではなく、三人称の立場で書かせるには有効である。

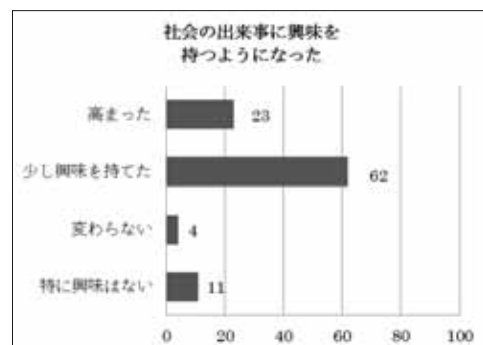
(3) スピーチ

新聞をもとにスピーチを行うことで、社会への関心は高まったようである。日直の番が近づくと新聞に目を通したり、友達に最近の話題について尋ねたりするなど、社会へ目を向けるきっかけとなっている。

2 アンケートから

6年生に次のようなアンケートを行った。

(1) N I Eの取り組みを通して、新聞や社会の出来事に興味を持つようになったか。



(2) 新聞の良さはどんなところだと思うか。

情報が多い
正確な情報が手に入る
社会の出来事が分かる
分かりやすい 読み返せる
とっておける 持ち運べる
見出しで出来事の内容が分かる
人の意見が分かる

(3) 新聞を読まない人は、なぜ読まないのか。

文字が多い（細かい）
面倒くさい 時間がない
読むのに時間がかかる
新聞に興味がない
読めない漢字がある（難しい）
テレビで情報を得ている
政治・社会に興味がない
本を読まない

NIEの取り組みを始めることで、8割以上の児童が、新聞や社会の出来事に興味を持つようになった。新聞を授業に活用し、新聞に関するスピーチに取り組みば、児童の関心は高まる。また、上学年の国語には新聞に関する単元があるが、新聞記者の方に実際にお話をうかがうことは、子どもたちへの意欲の喚起につながった。アンケートからも、新聞の良さを実感していることがわかる。しかし、日直のスピーチや授業での取り組みがないと、自主的に新聞に触れるようにはならないことも、傾向として見られた。6年生では新聞を購読している家庭が8割程度あり、環境としては恵まれているものの、学習の中で強制的に接する機会を設定しないと、新聞を手取るようにはならない。

新聞を読まない理由に関する記述を見ると、子どもたちにとって、新聞を読むことはややハードルが高い作業であることが分かる。新聞を読むための基礎力やスキルといった部分も関連していると思われるが、このような取り組みを継続していくことで、新聞を読むことは習慣化されていくであろう。

3 成果と課題

成果

新聞は社会との接点になり、視野を広げることにつながっていく。NIEコーナーがあることで、子どもたちが新聞を読む姿が珍しくはなくなってきた。地域の方からは、「今の小学生は新聞を読むんだね」と取り組みに好意的な言葉も聞こえてくる。

国語の単元で考えると、4年生で新聞づくり、5年生で紙面の構成、6年生で新聞の投書を扱うようになっている。重要なことを前半に書くという記事の書き方は、子どもたちの作文や感想文とは違う。情報を伝えるという「相手を意識した」文章の書き方は、これからの活動にも生かされていくものと思われる。

見出しや前文は、要点をまとめる際の手本としても有効である。簡潔な文章を読むことで、内容をいかに短くまとめるかということ意識させることができる。

課題

これまで学年ごとに児童の実態に合わせて取り組みを進めてきたが、担任からは新聞活用の難しさが聞こえてきた。新聞を記事として活用しようとするため、かえって選択肢を狭めてしまったようである。写真や見出しから内容を読み取るだけでも、新聞に十分触れることになるので、教師側が常に新聞を生かすという姿勢でいることが大切である。

次に課題となったのは、カリキュラム的な問題である。日々の授業に追われ、新聞の良さを感じながらも、活用するところまでいかないという現状がある。教師が十分に新聞を読んでいるかということ、読む時間を確保するのも苦勞する状況である。

子どもたちの様子で気になったのが、物事に興味を示さない児童の存在である。NIEに限らず、学習への意欲という点でも課題であり、どのように働きかけていくか、取り組みを考えていかなければならない。

新聞を購読している家庭も以前に比べれば減ってきており、新聞を持ってきたり、宿題として取りまかせたりすることが難しくなっている。こちらで提示したり、まとめたものを使って一斉に取りまさせるなどの工夫が必要である。

4 今後の取り組み

NIEコーナーは引き続き設置し、新聞に触れる機会は残していく予定である。新聞は、職員室で購読しているものを1紙、そして小学生新聞を置くようにする。さらに職員が前日の新聞を持ち寄るなどして、他紙にも触れる機会を持ちたいと考えている。

まずは、学校の中に新聞を目にする場所を確保し続けることが重要である。

(担当 教諭 行本 忠司)



言葉の力を高める NIE

本校では、実生活に生きて働く力として、子供たちの言葉の力を高めたいと考え、研究を進めている。具体的には、次のような力を高めたいと考え、日々の学習に取り組んでいるところである。

- ・音読する力
- ・内容を読み取る力
- ・自分の考えや意見を話す力
- ・相手の伝えたいことを聞く（聴く）力
- ・話型を身に付け、話し合う力
- ・書いたものを手掛かりに交流する力

これらの力を高めるための取組は、もちろん国語の学習が主であるが、本校では新聞を活用した学習活動(NIE)にも取り組んできた。今回は紙面を借り、これまでの実践について主に紹介する。

1 まずは新聞が身近にある環境づくりから

「新聞」のイメージを子供たちに聞いてみる。

「大人が読むもの」

「中身が難しそう」

といった声が多い。これは、新聞に触れる機会が少ないことがその要因の一つだと思われる。

そこで、新聞を身近に置いて、子供たちに「新聞っておもしろいな」「役に立つ情報がたくさん書いてあるな」といったイメージを多くもたせたい、と考えた。

具体的には、子供たちが休み時間などによく集まる場所（流し場の近く、廊下など）にNIEコーナーを作り、まずはちょっと触ってみられる環境づくりをしてみた。(次ページ写真を参照)

毎日、新聞を交換しに行く。初めのうちは開いた形跡がない日が続く。しかし、ある日開きっぱなしの新聞が目に入った。

「見終わったらきちんと閉じるんだよ・・・。」と思いながら、新聞を手にとった子がいることが分かりうれしくなる。次の日は閉じてはあるが、ページの隅がちょっとずれていて、読んだのが分かる。朝、新聞を置きにいくときに子供に声を掛けてみる。

平成26年度校内研究 岩沼市立岩沼小学校

研究主題
言葉の力によって自分の考えを深める児童の育成
～国語科・道徳の読み取りの指導を通して～

<目指す児童像>
読み取った内容、考え、感じたこと、自分の意見に思いやり、思いやりから伝わるように、自分の考えを深める児童

研究の意図
一人一人が学習を通して、自分の考えを深める児童の育成
一人一人が「言葉の力」を身に付けるための指導の工夫

●一人一人の考えを深めたい
●一人一人の考えを深めたい児童の育成
●一人一人の考えを深めたい児童の育成

<主な課題>
○児童に身に付けさせたい、そのための指導活動の工夫
○児童に身に付けさせたい、そのための指導活動の工夫

平成24年度
・国語科・道徳科の授業
・国語科・道徳科の授業

平成25年度
・国語科・道徳科の授業
・国語科・道徳科の授業

<研究の意図>
研究の意図と指導活動の工夫
研究の意図と指導活動の工夫
研究の意図と指導活動の工夫

<主な課題>
研究の意図と指導活動の工夫
研究の意図と指導活動の工夫

これまでの研究から

【單元評価観点一覧表（VET）活用後】

【單元評価観点】

【ICTを取り入れた授業実践と授業評価】

タブレット端末を用いた授業実践の様子
タブレット端末を用いた授業実践の様子

FiTouch2—国語科・道徳科の授業
FiTouch2—国語科・道徳科の授業

【H26 岩沼小学校校内研究概要リーフレット】

「新聞読んでる？」

「読んでます。」

少しずつ、読む子が増えているようだ。新聞を読んでいる姿を見て、周りの子供たちも興味をもっているようだ。

以上はある朝の様子である。こうして新聞が身近にある生活がスタートした。

2 話す活動に新聞活用

新聞を読む、とはいっても低学年の子供たちにとってはまだまだ難しいのが現実である。まだ学習していない漢字がたくさんある、言葉遣いも大人向けであることなどがその要因である。

しかし、読む以外にも新聞の活用の方法はある。それは写真である。本校では低学年や特別支援学級の子供たちが新聞の写真を活用し、次のように話す活動を行っている。

【2年生の例】

新聞の写真(例えば人の顔写真)をタブレット端末で撮影する(本校ではICT機器の活用を推進しており、日常的にタブレット端末を使用した活動を行っている)。そして、撮影した写真を教室の大型テレビに投影する。

(教師)「これは誰でしょうか？」

(児童)「う〜ん、分からないなあ。」

(教師)「じゃあ、ヒントだよ。この人はスポーツをしている人です。」

(児童)「野球をしている人？」

「それともサッカーかな？」

(教師)「じゃあ、この人の写真が写っている新聞を配るから探してみてね。」

子供たちは新聞をじっと見つめる。何とか情報を探そうとする真剣な表情が見られる。

少しすると、

「あった！！」

の声。

「〇〇の選手だよ。」

「本当だ。〜って書いてある。」

などと口々に見つけたことを話すようになる。

時間があれば、その人について知っていることを話させたり、子供同士でおしゃべりさせたりすることもでき、お勧めの活動である。

【特別支援学級の実践】

特別支援学級の子供たちも新聞に親しんでいる。

ここでも写真が大きな力を発揮する。

まず、机に新聞を広げる。そして、次のように話



【NIEコーナー①】



【NIEコーナー②】



【タブレットを使ってテレビに写真を投影】

す。

「新聞にはたくさん写真があります。これいいなあ、この写真おもしろそうだなあ、と思うものを切り抜いてみましょう。」

子供たちは興味津々で新聞を見つめたり、ページを繰ったりしている。

そのうちに一人一人が思い思いに写真を切り抜く。

全員が切り抜いたら、質問タイムである。

「どんな写真を選んだんですか？」

「この写真を選びました。(野球の写真を見せる)」

「どうしてその写真を選んだのですか？」

「野球が好きだからです。」

「お休みの日に野球はするんですか？」

「します。」

「誰としますか？」

「お父さんとします。」

.....

このように新聞の写真を媒介して、会話が弾んでいく。なかなか自分から話をするのが苦手な子供もいるが、こういった活動を続けることで、次第に話をすることにに対する抵抗が減り、話すことに自信をもてるようになってきているようである。

本校の教育目標のキーワードは「交流」である。子供たちが共に学び合い、より自分の考えを深められるようにさせたい。そのためには、自分の考えを進んで発表したり、相手の考えを聞き、質問したりする力が必要である。新聞はそのような力を育てる上で、手軽かつ効果的なツールなのである。

3 新聞を書き、交流する力を高める

考えたことや意見を相手に伝える方法はいくつかあるが、「書いて伝える」力は子供たちにしっかりと身に付けてほしい力である。

そこで新聞を書く活動を取り入れている。

新聞は、伝えたいメッセージが見出しや小見出しにまとめられていたり、「いつ」「どこで」「だれが」「何を」「どうした」という情報が簡潔にまとめられていたりする。新聞を書くことで伝えたいことを分かりやすく、簡潔に書く力を高めることが期待できると考えている。

国語の教科書では4年生の活動として新聞を書く活動が取り入れられているが、本校では3年生から新聞を書く活動を取り入れ、実践している。

【3年生の実践 (②は今後実践予定)】

3年生では、社会科や総合的な学習の時間で学習



【興味をもった新聞を切り取り、スクラップ】



【3年生 きゅうり新聞①】

したことのまとめに新聞を書く活動を取り入れている。調べたことをたくさんの人に知らせたい！という思いがあるため、どの子供も新聞を書くことに積極的に取り組む様子が見られた。

①社会科：農家の仕事

本校の保護者の方の中に、きゅうり農家を営んでいる方がいる。教科書で学習したあと、実際に自分の目で農家の仕事の工夫などを調べることにした。「今度、きゅうり農家のお仕事を見学します。どんな工夫や苦労があるか、じっくり見学します。見学したことを帰ってきてから新聞にまとめます。見学していない人にその秘密を伝えられるように、細かいところまでメモしましょう。」

新聞を書く目的を事前に指導し、人に伝えるということをしっかり押さえることが大事になる。自分だけが知っていることを伝える活動は、子供たちが大好きな活動である。そんな気持ちを刺激し、活動意欲を高めていく。こうすることで、見学当日、子供たちはたくさんのことをメモしていた。また

「きゅうりを作るとき、大変なことは何ですか？」

「きゅうりを作るときに、気を付けていることは何ですか？」

など、進んで質問する姿も見られた。

学校に帰ってきてから、新聞にまとめる活動を始める。たくさんメモしてきたことから伝えたいことを選択し、記事を書く。新聞を書く授業は4年生で行うため、ここでは「きゅうりを切る道具はきゅうりカッターと言います。」「ビニルハウスで温風を温めて温度を調整していました。」など、分かったことや感想などを短く書くことを伝えるだけにとどめることにした。

子供たちは、自分が調べたことを生き生きと書いていた。書いて伝えたい、という思いをもたせることで、書くことが楽しいと感じさせることが3年生の段階では大切だと思われる。

②総合的な学習の時間：岩沼探検隊「岩沼PR作戦」

今後総合的な学習として、ふるさと「いわぬま」のよさを調べる活動を行う予定である。地域のすばらしいところや自慢したい場所などを調べ、市外に発信する予定である。

発信する媒体として壁新聞にまとめ、多くの人の目に触れる形にしたいと考えている。

【4年生の実践】

4年生の教科書(下)に、『みんなで新聞を作ろう』という単元がある。これまでも調べ学習のまとめなどを新聞形式でまとめてきた子供たちではあるが、



【3年生 きゅうり新聞②】



【3年生 きゅうり新聞③】

ここでは読み手を意識し、分かりやすく、そして読み手が興味をもてるような新聞づくりの仕方について学ぶ内容になっている。(以下は本学習の流れである。)

- ＜学習の流れ＞
- ①身の回りの新聞を見て、新聞の形式や特徴を知る。
 - ②グループで新聞づくりの計画を立て、題材を集める。
 - ③割り付けを考えて記事を分担する。
 - ④インタビューしたり、資料を集めたりして、取材をし、下書きを書く。
 - ⑤お互いの記事を読み合い、意見を出し合い、新聞を仕上げる
 - ⑥他のグループの新聞を読み合い、交流したり、振り返ったりする。

「これからみんなで新聞づくりの学習をします。身の回りの出来事を取材して、学級新聞を作ります。今までは個人で新聞をまとめてきましたが、今回はグループで1つの新聞を作ります。」

単元に入るときに、導入で上記のように話をした。「えっ！グループで新聞づくり？楽しそう！」

これまで子供たちが書いてきた新聞は個人でまとめるものが多かった。今回グループで1つの新聞づくりをするということで、子供たちのやる気もがぜんアップしたようだ。

みんなで何か1つのものを作るのが子供は好きである。新聞は、記事を寄せ合い、1つの作品に仕上げることができるため、子供たちにとっても楽しい活動である。しかも、限られたスペースに記事を書く必要がある。簡潔に伝えたいことをまとめる力を高めることができる。これが新聞づくりのよさなのである。

「それではまず初めに、いろいろな新聞を見比べてどのようなことが書いてあるか確かめてみよう。」

ここで、NIE 活動助成で配達していただいている新聞各紙を活用した。小学生新聞を含め、普段目にしないものもあり、興味津々のようだった。

- 「新聞の名前が書いてある。」
- 「日付が書いてある。」
- 「見出しが大きな字で書いている。」
- などなど、たくさん発見することができた。
- 「こっちの新聞はこうだよ。」
- など、他紙を見ている友達と会話している様子も見れた。



【4年生が作った新聞①：一日新聞】



【4年生が作った新聞②：みんなで知ろう新聞】

この後、取材したいことを話し合い、取材をして新聞をまとめることができた。分かりやすい記事にするために必要な情報が入っているか、読み手を引き付ける見出しになっているかなど、友達と交流しながら振り返ることができた。書く力を高めると同時に学び合いができた活動となった。

なお、4学年では新聞を書く学習を年間を通して実践している。社会科見学のまとめや、福祉についての学習で手話について学んだときなど、それぞれの学習の節目に新聞づくりに取り組んできた。また教科学習のまとめをノートに新聞形式でまとめるなど、新聞づくりを応用する姿も見られている。

更なる新聞づくりの実践を今後も模索していきたい。

4 新聞で内容を読み取る力を高める

文章を読んだときに、何について書かれているのか、つまりその文章におけるキーワードや大事な言葉を理解する力を付けるのにも新聞は力を発揮する。

5年生では、新聞記事の見出しを考える活動を通して大事な言葉を見付ける活動を行った。

サッカーワールドカップにおいて日本が予選敗退してしまった記事を読み、そこから読み取ったことを見出しにした。見出しはその記事で一番伝えたいことを短く表現しなければならない。キーワードを考える(みつける)にはもってこいの活動である。子供たちは友達と相談したり、お互いに見合いながら、記事の内容がはっきりと分かる見出しを考えることができた。

新聞を活用することで、「読む」「書く」「聞く」「話す」力を高める実践のヒントを得ることができた。今後も教育への新聞活用について、実践していきたい。

(担当 教諭 石川 寛之)



【4年生：社会科見学等の新聞】



【記事から子供たちが考えた見出し】

(3) 大崎市立古川第二小学校（平成 25・26 年度実践指定校）

学びをつなぎ、学びを深める

～小・中連携を通して～

1 はじめに

大崎市立古川第二小学校は、平成 25・26 年度の 2 年間、NIE 実践指定校となった。本校から、多くの卒業生が進学する古川東中学校も、昨年度まで NIE 研究協力校であったこともあり、NIE を通した両校の連携を図ってきた。

今年度は「NIE を通して、中学校（古川東中）との連携を密にしながら、児童の思考力・判断力・表現力を向上させる」ことを目標に、昨年度の取組を踏襲しながら、小、中の 9 年間を見通した NIE を図り、学びをつなぎ、深めようと考えた。そこで、下記の 2 つの視点で NIE に取り組んだ。

- (1) 新聞に慣れ親しむための場の設定
- (2) 表現力を高めるための工夫

2 具体的な取組

(1) 新聞に慣れ親しむための場の設定

① 児童が日常的に新聞に触れられる環境作り

今年度は、下記のように新聞の購読した。

新聞名 \ 月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
朝日小学生新聞		○	○	○		○	○	○	○	○	○	
毎日小学生新聞		○	○	○		○	○	○	○	○	○	
河北新報	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
読売新聞	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	
朝日新聞	○	○	○	○								
毎日新聞	○	○	○	○								
日本経済新聞	○	○	○	○								
産経新聞	○	○	○	○								

また、教職員には旅行や帰省等をする際、旅先の地方紙や地域紙の提供を呼び掛け、できるだけたくさんの種類の新聞に触れることができるようにした。

さらに、昨年同様、「NIE どおり」、「NIE コーナー」と称した場を設定した。「NIE どおり」には、新聞を活用した学習活動の成果を知らせる記

事や、世の中の大きな関心事、知らせたい新聞記事等を掲示した。「NIE コーナー」には、新聞を閲覧するスペースや、児童と職員の知らせたい新聞記事を紹介できるようにした。



1 階廊下「NIE どおり」



3 階「NIE コーナー」

② 「NIE タイム」の実施

朝会や集会のない木曜日の業前活動の時間（15 分間）に行った。次掲の様に低学年から「新聞で楽しむ」「新聞に慣れる」「新聞に親しむ」と段階を追った学年ごとの目指す姿と、NIE タイムでの主な活動内容を挙げ、実施した。具体的な内容としては、教師による新聞記事の読み聞かせ、新聞紙そのものを使用しての活動、新聞記事を基にワー

クシートを使用した活動、教科の事前指導として新聞記事等を読む活動などを行った。

N I Eタイム活動例

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ○新聞で楽しむ ・新聞からカタカナや習った漢字を探す ・新聞で遊ぶ(新聞を利用した工作)等 ※読み聞かせ、N I Eコーナー見学
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ○新聞に慣れる ・新聞を読む(「いつ・どこで・だれが・何をした」を読み取る) ・新聞を書く ・意味を調べる ・感想を書く 等
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ○新聞に親しむ ・新聞記事を選ぶ、利用する ・記事や意見文を書く ・はがき新聞を書く
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・記事内容の要約 (・討論する)

○低学年のN I Eタイムの様子



教師による新聞の読み聞かせ(上)



N I Eコーナーの見学(下)



好評だった「習った漢字を見つけよう」(2年生)

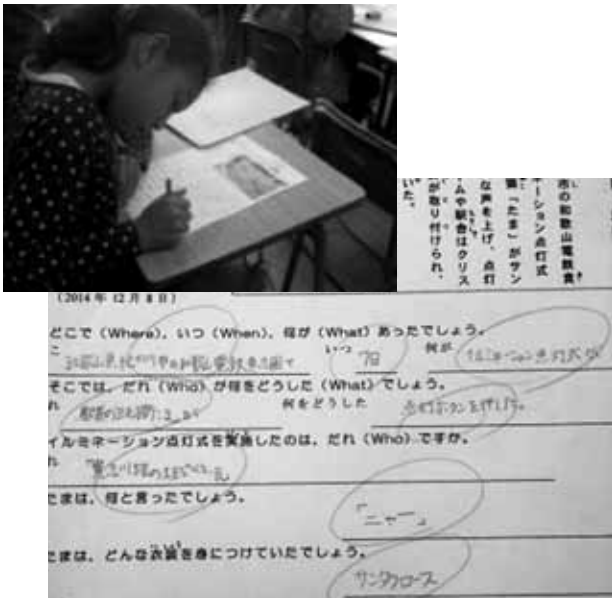
これから、N I Eのとりにくみについてしようかいます。まずは「N I Eタイム」です。しゅう会のない木よう日の朝に、先生が新聞記事を読んでくれます。ほくは、アップルウォッチの記じがおもしろかったです。でん話やメール、インターネットなどができるうで時計を、ほくも早くつかつてみたいと思ひました。

そのほかに、新聞の中から、ならつたかん字をさがす活どうもしました。とてもおもしろくて、む中になつてたくさんさがしました。教室の中には、「子ども新聞」がいつもおいてあつて休み時間などに、みんながよんでいます。

二年 ○○ ○男

低学年は、新聞そのものに初めて触れる児童もいるので、楽しいこと・ためになることが書かれていることを伝える活動や、新聞の活字そのものを使って楽しむ活動等に取り組んだ。また、「N I Eどおり」や「N I Eコーナー」を学級ごとに見学するなど、新聞を活用した活動に触れさせる体験を意識して行った。中でも、新聞記事から既習の漢字を探す「習った漢字を見つけよう」は、特に意欲的な取組が見られた。

○中学年のNIEタイムの様子



3年生：ワークシートを使用した活動（上）とワークシート（下）



4年生：ワークシートを使用した活動（左）と、ワークシート（右）

中学年はワークシートの活用を中心に取り組んだ。目指す姿の一つである「いつ」「どこで」「だれが」「何をした」を読み取ることは、3年生も記事から抜き出すことができるようになった。4年生では、特にインパクトのある写真のある記事を取り上げるなどして、記事に対する興味や関心を高め、感想を引き出せるようにした。また、感想を書き、発表することができた。さらに、それを基に話し合うこともできた。

○高学年のNIEタイムの様子



内藤選手のいじめ体験の記事を読み取り、いじめた同級生の気持ちを想像することができた（5年生）



今年の漢字から自分にとっての一年を発表した。担任はみんなと出会った一年を振り返った。（6年生）



高学年は、ワークシートを活用したり、国語科の学習に関連させた活動を行ったりした。6年生は、古川東中との交流の時間にも充てたりもした。読むことに抵抗を感じる児童もいたので、苦手な児童にも興味や関心がもてるような記事内容を選んだり、取り組みやすい質問をしたりした。少しずつではあるが、自らスポーツの記事を探すなど、意欲をもって取り組めるようになってきた。また、未習の言葉や漢字も、国語辞典や漢字辞典を使って調べる習慣が身に付いてきた。

(2) 表現力を高めるための工夫

①新聞を活用した授業実践

国語科の学習計画にNIEを連携させて実践を行った。例としては、6年生「新聞の投書を読み比べよう」では、NIEタイムを活用し、事前に投書を読み、分からない言葉の意味を調べておいたり、感想を書いたりしたものを単元の導入に用いた。事後のNIEタイムでは、別の投書を読み、学習したことを生かして文章構成図を書いたり、その投書に対する自分の考えを書いたりした。

また、国語以外でも、授業に関係する記事を読み聞かせた。このような実践は、「NIE実践活動集」に記録し、後に活用できるようにした。

古川第二小 NIE実践活動集	
平成26年7月 実施	
6年生 (授業・NIEタイム・その他)	
教科・単元名(どこで)	国語・新聞の投書を読み比べよう
記事の内容(何を)	河北新報・声の交差点に掲載された投書記事
活用する方法(どのように)	事前に記事読み、単元の導入段階での活用、事後の活動
単元	<p>主な学習活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 新聞に掲載された実際の投書を読み、「書き手の主張」を見つけ、投書に対する自分の感想を書く。 気になる言葉を見つけ、意味を調べる。 <p>留意点 ◎NIE関連内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎NIEタイム、週末課題の「新聞記事紹介」で投書を読む。 ◎事前に新出漢字を学習し、あらかじめ家庭学習で本単元を読む。(内容理解の促進につなげる) ◎新聞の教材化を図り授業の中で活用することで、読み取った資料を基に、自分の見方や考え方を広げたり、深めたりする力を育てる。
単元	<p>1 新聞の投書について興味をもち、その特徴を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎投書が意見文であることを理解する。 ・決められた字数で自分の意見を書き表している文章 ◎意見文を読むときの観点について理解する。 ・書き手の意見や主張 ・読み手を獲得するための理由付けや根拠 ・自分の意見 ◎本単元の学習目標「読み手を納得させる投書にする技を手に入れよう」を知る。 <p>◎新聞に掲載された実際の投書を読み、文章構成図を書く。</p> <p>◎投書に対する自分の意見を書く。</p> <p>◎「新聞記事紹介」で投書を読む。</p>

古二小版NIE実践活動集

②「みんなに知らせたい記事」の紹介

5・6年児童が新聞記事の中から自分が興味を持った記事を選んで切り抜き、自分の感想等

を含めて簡潔にまとめる活動を行った。現在は、週末の宿題としたり、代表児童が昼の放送の「みんなに知らせたい記事のコーナー」で直接紹介したりしている。教職員も輪番で取り組み、昼の放送で紹介した。どちらの作品も、各階のNIEコーナーに掲示している。



みんなに知らせたい記事 (学習活動)



みんなに知らせたい記事 (左:児童 右:教職員)

③外部講師を招へいしての研修会

(5・6年NIE研修会)

新聞をより身近に感じるようになった児童がさらに積極的に新聞を活用できるよう、NIE研修会を行った。新聞社の職員を招へいし、新聞記事や意見文を書く活動や取材の仕方について学んだ。



5・6年生の研修会の様子 (左右共)

また、小中の学習指導や学習活動共有化を図りたいと考え、教職員対象のNIE研修も行った。古川東中をはじめ、近隣の小学校の先生方にもご参加をいただいた。



教職員対象の研修会の様子

④「新聞記事を作ろう」の取組

「5・6年NIE研修会」での学びを生かす場として、夏休みに新聞記事作りに取り組ませた。家族や店員、職員等、それぞれが対象を決めて取材を行った。作品(記事)は、新聞記事コンクールに応募し、論説委員長賞をはじめ、数名が入賞した。



新聞記事コンクール入賞作品

⑤中学校(古川東中)との連携した活動

前述の通り、古川東中学校では昨年度までの2年間、NIE研究協力校として実践していた。現在も教科をはじめ、総合的な学習や行事のまとめの新聞や、はがき新聞の作成、新聞記事の要約などに取り組んでいる。そこで、本校は、古川東中学校と連携を図り、中学校で行われているNIEにつながりがもてるようにしようと考えた。小・中9年間を見通し、段階を追った学年ごとの目指す姿(前掲)を示し、実施した。交流は6年生全員と古川東中学生徒(学年、新聞委員等)とで間接的にを行った。

○「修学旅行新聞」の交流

中学3年生(古川東中)が作成した修学旅行新聞をNIEタイムで読んだ。レイアウトをはじめ、文章表現、図やイラスト、彩色の効果的な使い方等に気付き、学ぶことができた。児童は、表現のすばらしいところや感想を付箋紙に書き、返却する新聞に同封した。



- ① リードや押し紙がカラフルでも工夫されています。
- ② 感じたことや思ったことに加え、活動したことも書かれていたのが分かりやすいです。
- ③ 見出しやリードの書き方が読みたくなるような書き方が良いです。
- ④ この記事を読んで、ぜひカクテルミュージアムやテイクアウトに行き体験してみたいと思いました。

中学生の修学旅行新聞に学ぶ(上)

学んだことを付箋紙に(中・下)

大事な事には、色を使って
線と身の木のいたに○○○と
ふらに丸をつけるのはいい
と思います。
う、と女の学いしているのも
すごいなーと思いました。
ホホというじをクセーと
るのもいいと思います。
ぼくもまおさせてもいいま

6年生は会津若松方面への修学旅行後、まとめの新聞を作成した。中学生の新聞から学んだ表現の仕方を参考に書くことができた。そして、完成した新聞に対して、古川東中の生徒から気付いたことなどの感想をいただいた。書き手のよさを認める温かいコメントに、「細かいところまで見てもらえてうれしい。」などの感想がたくさん聞かれた。



6年生の修学旅行新聞を読み、感想を書く生徒

○「はがき新聞」の交流

古川東中との学びのつながりを考えたとき、はがき新聞作りがとても有効な活動であると考えた。「相手意識をもって伝える」ことや「限られた字数で相手に伝える」ことで表現力が養えると考えた。何よりも、古川東中で行われている活動を見学が行うことで、中学校での活動にスムーズに取り組み、中学校での学びをより深めることが期待できるからである。また、作ったはがき新聞を交流させることで、中学生とコミュニケーションが取れ、中学校生活の不安を減らし心構えもできるであろうと考えた。そこで、「古二小版はがき新聞」作りに取り組むことにした。



6年生が作成した「はがき新聞」

職場体験で本校を訪れた中学生から、中学校生活について学ぶ機会をもった。話の内容や質問を基に、「小学校生活と中学校との違い」「勉強や

部活動」「中学校生活の心構え」記事に新聞作りを行った。

3 成果と課題 (○：成果、●：課題)

(1) 新聞に慣れ親しむための場の設定

- NIEタイムのワークシートでの活動では、記事から5W1Hを押さえて読むことができるようになってきた。また、どこに何が書いてあるかを記事から探さなければならないので、真剣に読む児童の様子がたくさん見られた。
- 新聞の存在を知らない児童も、NIEタイムで記事の読み聞かせを続けることで、少しずつ興味をもてるようになった。
- 休み時間等、NIEコーナーにある新聞を手にとって読んだり、先生方からの記事紹介を読んだりする姿が見られた。
- 記事の読み取りだけでなく、内容から自分の意見を持ち、ワークシートに記したり、話し合いに発展させたりすることもできた。
- 低学年では小学生新聞の記事内容でも、さらに分かりやすく説明しないと理解することが難しかった。

(2) 表現力を高めるための工夫

- 「みんなに知らせたい記事」への取組は、世の中の出来事に関心をもったり、記事の内容から自分なりの考えを書いたり話したりする上で有効であった。また、6年生は、記事の「要約6行」、「感想6行以上」書くことをめあてとして取り組んだ結果、ほとんどの児童が書けるようになった。
- 古川東中生徒の作品（はがき新聞、修学旅行新聞）を実際に読むことは、自分の作品制作に有効だった。また、中学生の丁寧なコメントは、取り組む意欲をさらに高めるものとなった。
- はがき新聞は、相手が中学生（古川東中）とい意識をもって表現することができた。さらに差し出す相手を広げ、相手に応じた文章表現に取り組ませていきたい。
- 宮城県学力・学習状況調査の結果で「読む」「書く」「話す・聞く」の3つの観点で県の正答率を上回った。新聞記事を読むことと、記事の内容を要約したり感想を書いたりする活動を継続したことの効果が表れたと思われる。
- 規模の大きい小・中学校間での交流は容易ではなかった。より綿密な話し合いが必要だった。
(担当 教諭 千葉 修)

関わり合いを柱とした応用力育成のための新聞活用

1. はじめに

本校の今年度の研究主題は「関わり合いを柱とした応用力の育成」である。言語活動の充実をベースとし、他と積極的に関わり合う中で、応用力を育成していくことが今日的な教育課題に込めるものであると考えて、設定した。

これをふまえ、2年間、本校のNIE研究主題を「関わり合いを柱とした応用力育成のための新聞活用」として取り組んできた。今年度も昨年度に引き続き9月から12月までの4ヶ月間、6社（河北新報、毎日新聞、読売新聞、産経新聞、日本経済新聞、朝日新聞）に協力していただいた。ここでは、これまでの本校の取組を紹介したい。

2. 活動のねらい

- (1) 新聞に親しむ。
- (2) 新聞を読むことで情報を得、得た情報をもとに生徒相互の関わり合いを深める。

3. 実践内容

新聞委員が週替わりで各クラスへ新聞配布・各階での新聞掲示を行った。



<新聞委員による配布>



<廊下の掲示板>

(1) 朝の会・帰りの会での新聞記事紹介

「今日の気になるニュース」

朝の会や帰りの会で、日替わりで生徒（日直または出席番号順による）が注目した新聞記事を紹介している。家庭で新聞を取っている生徒は家庭から、家庭に新聞がない場合は学校で新聞を提供し、選ばせている。記事紹介を行っていく中で、自分の考えを述べる生徒がいたり、紹介の仕方に工夫を凝らして説得力の高いスピーチをしたりする生徒も現れるようになった。

(2) 学級での新聞記事掲示

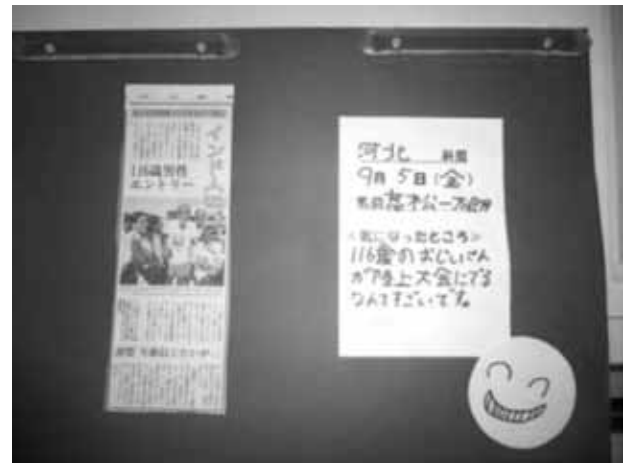
「今週のニュースはこれだ！」

① 特別支援学級での取組

写真のついている新聞記事を中心に選び、感想を記入する。さらに、事前に作成した表情シール（「たのしい」「うれしい」「かなしい」「困った」「怒った」）も貼った。9月当初は写真を見れば記事の内容がすぐにわかるものを選びがちだったが、徐々に写真だけでなく、記事の内容を教師に尋ね、中身を理解しようとする態度が見られるようになった。



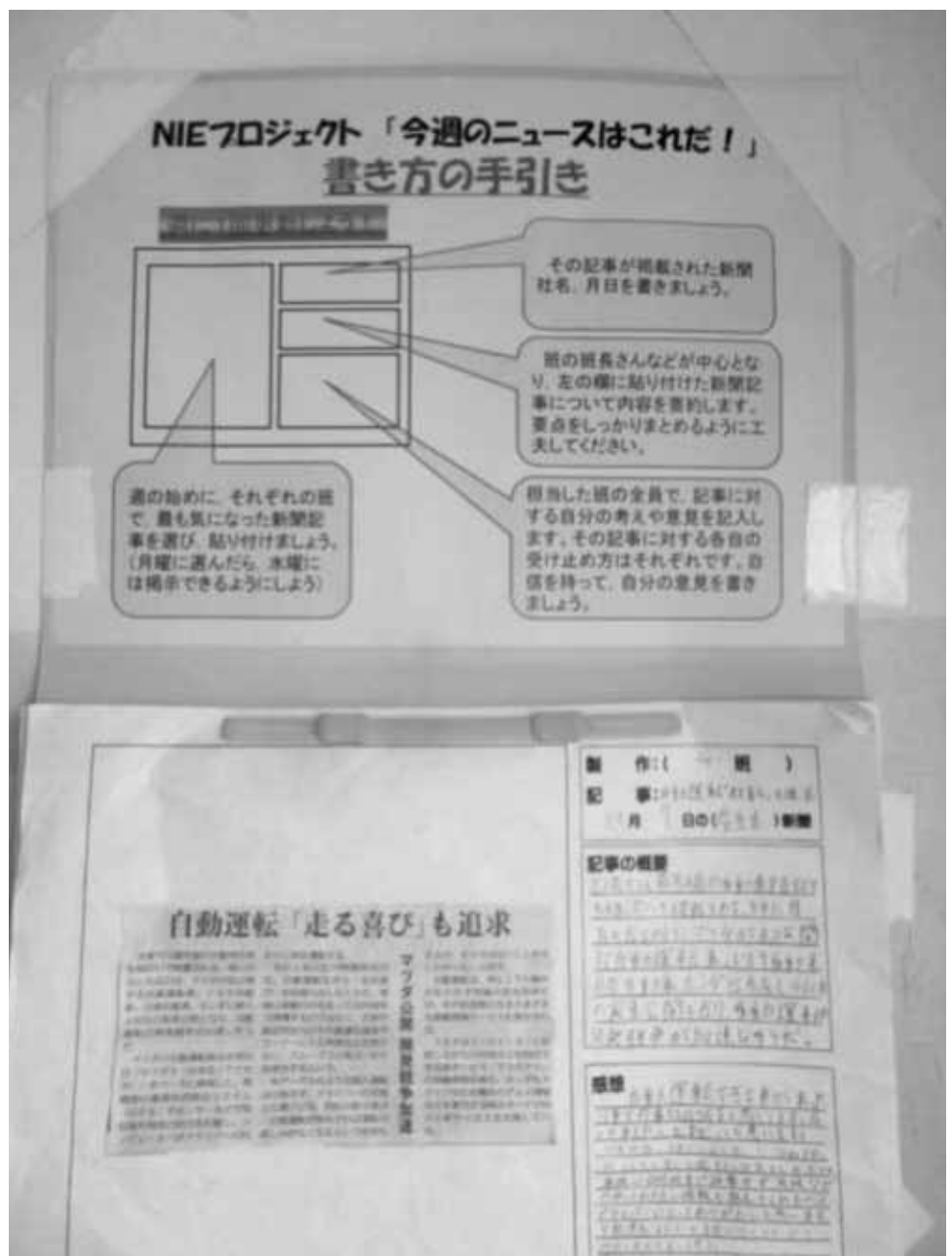
<表情シール>



<新聞記事の紹介>

②通常学級での取組

昨年度に引き続き、各学級で班ごとに新聞記事紹介を行った。各班でワークシートに気になる新聞記事を選んで貼り、それに対する意見を班員全員が記入する、という活動を週1回のペースで行った。9月当初は新聞の一面を中心に、大きなニュースになっているものを選ぶ傾向があったが、徐々に一面以外の小さな記事にも目を向けるようになってきた。教室に掲示したものを興味深く見る生徒も増えた。



<班での新聞記事紹介>

(3) 廊下の新聞掲示

廊下を通る生徒に自然な形で、その日のニュースに触れさせる機会を提供するため、校舎内の各階に新聞掲示板を設置した。9月から、新聞委員会が交代で、新聞の一面を掲示する活動を行っている。

昨年度は、毎日、第1面・県内面・国際面・経済面を掲示していたが、今年度は1週間のトップニュースの移り変わりがわかるような掲示を行った。また、昇降口前の掲示板では同日の2つの新聞のトップニュースを並べて掲示した。



<各階での掲示>



<昇降口前での掲示>

(4) 学級新聞作り

本校では、学級新聞作りを継続して行っている。各学級の新聞委員や新聞係が中心となり、約2ヶ月に1回の割合で、学級毎に学級新聞を作成している。出来上がった各学級の新聞は、それぞれの学級に配付するだけでなく、「校内新聞コンクール」として職員室前の廊下に掲示している。学年の金賞を受賞した学級は、仙台市中学校学級新聞展に出品される。今年度は2年生の作品が優秀賞を受賞した。



<表情シール>

(5) 野活新聞作り

1学年では、10月に行った山形での野外活動のまとめとして、民泊班ごとの新聞作りを行った。

時間の確保の難しさも重なり、新聞社の講師派遣依頼はできなかったが教師が基本的な新聞のレイアウトや情報収集の大切さなどを指導し、各々が新聞を作り上げた。



(6) 教師の気になる新聞記事紹介

教員がそれぞれ新聞から気になるニュースを取り上げ、掲示を行った。毎日目にする新聞でも、どの先生がどういった記事を取り上げているのかを知ることは、生徒にとって興味深く、新聞をより身近に感じるきっかけになっている。



<先生の気になるnews>

(7) 各授業での取組

①学級活動

(i) 「言葉の貯金箱」

生徒一人一人に新聞を配付した。生徒はその中から心に残ることばを選び、切り抜いたその言葉をワークシートに自由に貼り、選んだ理由を記入して掲示した。さらに、お互いの作品を鑑賞する時間を設け、生徒同士のそれぞれの思いを共有することができた。普段声に出さない友達の思いや考えを知ることによって、より深く他者理解ができたようだった。



(ii) 「喜怒哀楽」

新聞の中で気に入った記事を切り取り、その記事の内容を「喜怒哀楽」で表現し、感想とともに発表する活動を行った。



(iii) 「友人の紹介記事を書こう」

～友人のよいところを仲間に知らせよう～

NIE 研究大会での実践である。

新聞記事から人物紹介の手法を学び、インタビューを行ったうえで、友人の紹介文を作成した。作成する紹介文は、魅力的な人物紹介になるように心がけ、完成した紹介文は、互いに読み合った。



②総合的な学習の時間

「未来を目指して」

NIE 研究大会の実践である。

「働く人の思いが伝わる新聞記事」を通して、実際に、「働く」とはどういうことか、どのような思いで働いているのかについて考えさせた。事前に集めた新聞記事をもとに、班で互いの意見を交換し、考えを述べあった。



②社会

(1)「授業の導入・話題作り」

内容と関連する記事を教師が紹介し、授業の導入や資料として活用した。

(2)「トップ記事調べ」

1学年では、9月の新聞配布の時期から、新聞の一面の見出しを写す活動を行った。書くこと、書きためたものを読み返すことで、世の中の動きが確認でき、生徒の興味関心も高められた。

きょうのトップ記事				
日/月	「5 T A P」欄外行わす	曜日/時間	採録/掲載/雑誌	(原/日新聞)
10/29	津波被害2660世帯に賠償金交付		津波被害2660世帯に賠償金交付	(河北新報)
11/30	1月の 観、活気戻りか		1月の 観、活気戻りか	(河北新報)
12/31	小沢氏事務所にて捜査東京に捜査問題		小沢氏事務所にて捜査東京に捜査問題	(河北新報)
1/4	横浜市中区議会議員選挙		横浜市中区議会議員選挙	(河北新報)
1/5	全国図書の日		全国図書の日	(河北新報)

③理科

夏休みの理科の自由研究として、新聞のスクラップを行い、感想や考察をまとめた生徒もいた。

<新聞スクラップの例>

- ・台風に関するスクラップ
- ・エネルギーに関するスクラップ

④音楽

演奏会の批評(河北新報「日曜わくわくサンデー東北よもやま話」)などを、鑑賞の授業に使用し、身近な音楽に触れることへの楽しさを伝えた。

⑤技術

「メディアリテラシー」の授業を行った。

6種類の新聞を提供していただいていたので、各新聞の読み比べができた。同じ記事に対して、各新聞の論調がどのように異なっているのかについて比較したり、どの点が同じなのかを考えたりしながら読み進めることで、情報を入手する力を養った。



4. 教員研修について（校内研修会の実践）

7月31日（木）に幸町中学校の木下晴子先生を講師に迎え、校内研修を行った。前半は「NIEとは何か」「NIEによる教育的効果や新聞活用の意義」など、豊富な事例や授業実践を交えながらご講義いただいた。後半は、実際にそれぞれが新聞記事を選び、感想を共有しあう『喜怒哀楽』の活動を行った。研修の一環として行った活動であったが、新聞記事選びやワークシートの記入・意見交換と大いに楽しみながら活動を行うことができた。実践例の紹介や、実際の活動など、新聞の活用方法について理解を深めることができた。



おわりに

NIE 研究協力校として、まず「生徒の身近に新聞を置こう」ということからスタートして取り組んできた2年間である。劇的な変容ではないが、11月に行った生徒アンケート結果を見ると、約半数の生徒が「新聞を目にする機会が増えた」「興味が高まった」と、新聞を身近な存在として感じるようになったことがわかった。そして、これまで新聞を読む機会があっても、テレビ・ラジオの番組欄やスポーツ欄がほとんどであった生徒たちが、第1面をよく読むよ

うになったことも、注目すべき点と言える。情報の収集はインターネットで、発信はスマホやケータイということが主流になりつつある生徒たちにとって、新聞は、話す・聞く・読む・書くという様々な言語活動をより充実させるきっかけを作ってくれたように思われる。

意識が変わったのは生徒だけではない。私たち教員も同じである。当初は、新聞を取り入れることに抵抗を持つ教員も少なくなかった。しかし、現在では、教育活動の様々な場面で自然に新聞を取り入れることにより、教育活動の質の向上にNIEが大きく貢献することを体感した。

今後も、教育活動の様々な場面に新聞を取り入れることは可能である。ただし、あれもこれもと取り入れようとすると、表面的な取組になり、さらには生徒も教員も負担感ばかりが増してしまうことになりかねない。大切なのは無理をせず、小さな実践でも積み重ね、続けていくことである。現在、各学級で週1回行っている「今週のニュースはこれだ！」や、朝の会や帰りの会で紹介している「今日の気になるニュース」などは今後も丁寧に取り組んでいきたい活動である。

2年間、生徒にとっても、教員にとっても貴重な経験をさせていただいたことに感謝をしている。今回の取組をもう一度振り返り、この経験から得たものをこれからの本校の教育活動に十分に生かしていきたい。

（担当 教諭 渡辺 真純）

新聞を活用しようとする態度を育てる

1. はじめに

NIE実践指定校の1年目である昨年度は、児童生徒が新聞に親しみながら相互のコミュニケーションを活性化させることを目標に取り組んだ。2年目である今年度は一歩進めて、児童生徒に新聞を活用しようとする態度を育てることを目標として取り組んできた。

2. 常時活動

①河北新報社のデータベースの活用。

②スクラップ活動

「この記事に注目！」と銘打ったスクラップ活動を全学年（小学1年生～中学3年生）で取り組み、全校のNIEコーナーに常時掲示した。



3年生以上では日直の児童生徒がその日に注目してほしい記事を選び、朝の会や帰りの会で発表したり、日直日誌に5W1Hやコメントを書いたりしている。



NIEコーナーは通行量の多い場所にある。12月現在では右の方には4年生の手書き学級新聞や5年生が宿泊学習の振り返りを新聞に書いたものも掲示している。

手書き新聞と全学級のスクラップが掲示されているので、他学級、他学年の興味や関心、考え方などが分かり、よい刺激を受けた児童生徒もいる。自分のスクラップが掲示してあることが自信につながり、その後新聞によく目を通すようになった児童もいる。

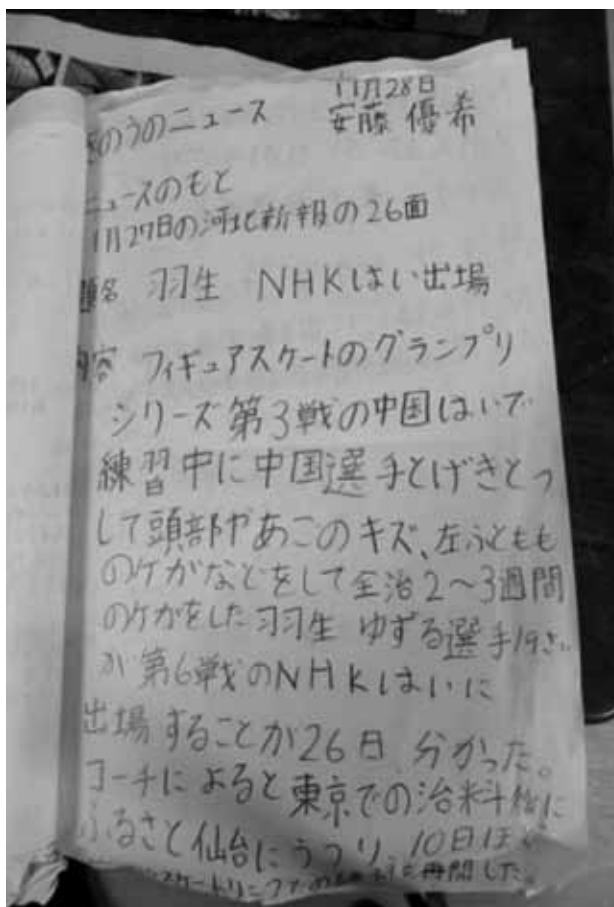
右上の写真の児童は自分のスクラップを時々眺めにくる。学級のスクラップをめくりながら、友達を選んだ記事や感想にも興味をもち、NIEコーナーの楽しみ方を学んだ。



3年生は上の写真のように日直児童は選んだ記事に付箋を貼る。すると担任がその記事をコピーして日直児童に手渡してスクラップをさせる。学年で一部の新聞を購読しているので、1つの記事に2人の付箋が貼ってあることもある。



4年生学級では日直が書いてきたものをクラスでもファイルし、前ページのようにぶ厚くなった。中を開いてみると、あるページには下のように書かれていた。



5年生学級では日直になる一週間前から新聞を読み続けて記事を選ぶ児童もいる。すると同じ週に日直になった児童同士で互いに同じ記事を選ぶこともある。同じ記事を読んでも感想は人それぞれであることに他の児童も興味を示している。書くことは3点。

- 1、5W1H
- 2、この記事を選んだ理由
- 3、感想

これに対して担任もコメントを書く。という作業を続けている。

中学1年生は毎週末に宿題のスクラップに取り組んでいる。一週間家庭で新聞をストックしておき注目してほしい記事を選ぶ。選ぶに当たり、生徒は家族に相談し、そこから親子の会話も弾んでいる。また、生徒の選んだ記事と書いたコメントを見て、担任サイドでは新しい発見がある。この生徒がこの記事を選んだのかという驚きや納得があり、生徒の視点も分かる。つまりよりよい生徒理解へとつながっている。

ということだ。スクラップのテーマを担当が毎週与えている。例えばオリンピックに出てくる国に関する記事。6月であれば沖縄の地上戦に関する記事である。中学1年生では新聞が身近な存在になった。

中学2・3年生は日直がその日の記事から1つ選んで学級日誌に貼り、コメントを書く。担任がそれにコメントを書く。という活動を続けている。だから級友同士で共通の話題も生まれる。担任サイドでは生徒が好む記事の傾向を知ったり、生徒の新しい面を発見したりしている。年度初めにはトップ記事しか読まなかった生徒も徐々に新聞の全ページに目を通すようになってきた。

下の写真は中学3年生が記事を切り取っている様子。



③NIEタイム

毎週決まった時間帯にNIEタイムを設けている学級もある。小学2年生2学級と4年生1学級である。

小学2年生では週1回朝読書の時間に家から持ってきた新聞を読む時間を設けている。年度初めには写真を眺めるに留まったが、秋頃から記事文にも目が向くようになった。家庭の協力も大きかった。児童が読む記事の漢字に振り仮名を振ったり、読む記事を選んで一緒に話し合う保護者もいる。その結果、小

学生新聞なら概ね内容が理解できるという児童も現れてきた。中には外国を知る記事、科学の連載、英語のクイズ、他校の様子、最近の流行・・・とお気に入りの記事のある児童もいて、本校の公開研究会の折、NIEのプレゼンテーションを行った。

(プレゼンテーションの原稿を掲載)

4年生の1学級でも週1回の朝読書の時間帯に新聞を読む時間を設けている。担任が選んだ記事を印刷して配り、朝の会で感想や意見を発表し合う。その結果、「読んで考える」という習慣がみについた。また担任は記事の最後に「2面に続く」と書いてある1面記事を意図的に選んできた。2面を読むことを勧めてこなかったが、読む児童が増えてきた。

《小学2年生のプレゼンテーションの原稿》

プレゼンテーションは9名で行った。

私たち2年生は新聞に触れる良さをお伝えします。最近のニュースに興味をもった人がいます。

私はエボラ出血熱に興味があります。エボラ出血熱はかかると高い熱が出たり、吐いたり、いろいろなところから血が出て、とても大変な病気です。新聞にはエボラ出血熱についてのことがたくさん載っているので役に立ちます。私はエボラ出血熱にかからないように用心したいと思います。そして、家族にもかからないでほしいです。世界中の子どもたちや世界中の家族にもかからないでほしいです。



ニュースだけでなく流行をキャッチすることもできます。

ぼくは毎週「読売KODOMO新聞」を読んでいます。すると最近の流行が分かります。少し前はエボラ出血熱の治療にはインフルエンザの薬が効きそうなことが分かりました。最近では東京でけん玉がはやり始めたことを知りました。何故かと言うと、外国の人が日本からけん玉を持ち帰って、インターネットで技を決めていました。それを日本の若い人が見てすごいと思い、けん玉のスクールに通い始めたことがきっかけです。ぼくは新聞を読んで東京の流行を知り、得をした気分です。



私たちは宮城の小学生ですが、違う県の小学生の記事を読んで得をした気分になっている人もいます。

新聞の良いところは、違う県の小学校のイベントや楽しいことやがんばったことが載っているところです。例えば、神奈川県横浜市鶴見区平安小学校で人気の理科コーナーには月替わりでいろいろな理科グッズが並ぶそうです。このように、いろいろな県のいろいろな小学校のことを知れることは、勉強になるし、とてもうれしいです。



違う県だけでなく、遠い国での出来事をも知ることができます。

新聞の良いところは、遠い国で起こった出来事や、遠い国にあるきれいなものや新しい建物ができたことが分かることです。例えばパキスタン人でノーベル賞をとったマララさんが2013年7月にアメリカの国連本部で演説をしたことや今年の10月に世界中で皆既月食をたくさんの人が見ていたことやアメリカのテロ跡地に高層ビルができたことが分かりました。新聞を読んで遠い国のいろいろなことが分かることはとてもおもしろいし、すごいと思います。



一方、連載を楽しむこともできます。

私は毎日小学生新聞に載っているまつもり先生の「めっちゃおもしろサイエンス」という連載が大好きです。まつもり先生は山梨大学の先生で、「どうすればみんなの考えを科学的な見方に結び付けられるのか」を考えているそうです。例えば、まつもり先生は、なぜ台風が通り過ぎた後、いい天気になるのかということの説明してくれます。私はもっとまつもり先生の「めっちゃおもしろサイエンス」を読みたいです。

連載を使って英語を学ぶこともできます。

私は新聞を読んでいて英語の言葉を学んでいます。私は河北新報こども新聞の「英語パズルにちょうせん」という連載を楽しんでいます。パズルを解きながら英単語を覚えることができます。最近では絵の中にかいてある生きものを探しながら、生きものの単語を覚えました。例えば、caterpillar, butterfly, Spiderです。新しい単語を知ることはとてもうれしいことです。私はこれからもこの連載を通して英語を学びたいです。



英語だけでなく国語の学習もできます。音読の価値が知った人がいます。

私は音読の記事が載っている新聞を見つけて読んでみて、いいことがありました。それは音読をすることで、口や耳、目の運動になることです。更に、音読をすることによって意味がはっきりと分かるようになります。それまでは音読が面倒くさいを思っていました。けれどもその日から音読を大切にしようになりました。これからも大切に音読を続けたいです。この新聞記事に出会ってよかったです。



自分たちで新聞を読むだけでなく、大きい学年の人たちのスクラップを見て、初めて知ることや考えさせられることもあります。

私は2階のNIEコーナーの記事を見ることがあります。最近では6年生のスクラップが心に残っています。ぱっと見たとき6年生の思ったことがたくさん書いてありました。私はすごいと思いました。読んでみたら地球温暖化のことが書いてありました。原因の一つは二酸化炭素がたくさん出ていることです。二酸化炭素を出すのを皆で止めたらいいと思います。私も紙のむだづかいを止め、ご飯を残さないようにします。6年生のスクラップを見られて良かったです。

このように新聞に触れる良さはたくさんあります。私たちはこれからも新聞に触れ続けていきます。これで私たちのプレゼンテーションを終わります。

《プレゼンテーションの指導に当たり》

このプレゼンテーションを行うに当たり、2年生児童全員が自分のNIEを振り返るよい機会となった。また児童が新聞を読み、スクラップをする活動は続けてきたが、各自がどのような内容の記事に興味を持っているのかを児童相互が知らずに来た。それを知ることができたのは良かった。友達の興味を聞いて新聞を読む目が豊かになった児童もいるし、今まで読んだことのない内容の記事にも目を向けられ

るようになったことは収穫である。プレゼンテーションを行った児童だけでなく、他の児童も新聞に触れる良さを知っているので今回の発表が成り立った。紙媒体の新聞を購入して我が子に触れさせた保護者の協力にも感謝をしている。

今後は児童が新聞を継続して読み続けられるように支援していきたい。そのために今回プレゼンテーションを行ったように、各自が新聞に触れて良かったと思う内容について交流を持たせていきたい。発表の仕方については言語技術科を始めとして授業で身につけた言語技術を生かして行うことができた。はじめにトピックを述べ、その後に例示する、理由を述べる。主語を入れて話すなど。

④新聞の常置

各学年の廊下に新聞を常置している。毎朝その日の新聞を置く。児童生徒が休み時間や授業の合間に気軽に新聞を読むことができることを目的にしている。小学1～4年生の廊下には毎日小学生新聞、小学5年生～中学3年生までは河北新報を置いている。小学校低学年の廊下を中学生が複数名で通りかかったとき、小学生新聞の記事を読み、「そういうことか!」とうれしそうに納得して帰っていったこともある。



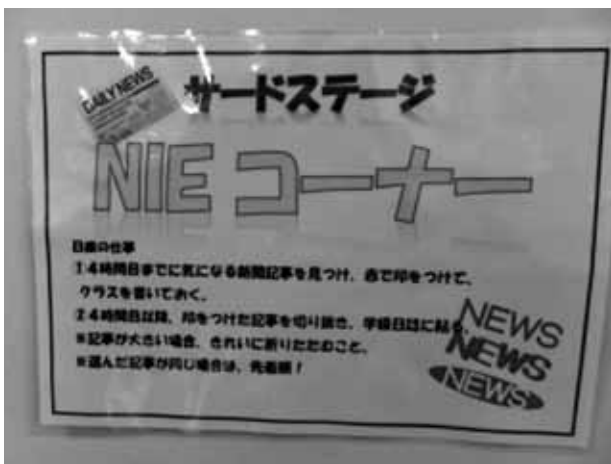
これは小学1年生の廊下の新聞。



4年生が新聞を読んでいる様子。



中学3年生が新聞記事を選びながら笑っています。



こちらは中学3年生の廊下のコーナー。



3. 夏休みの取り組み

小学3年生以上の児童生徒全員の宿題として日本新聞協会主催「いっしょに読もう新聞コンクール」に取り組んだ。親子や家族と一緒に新聞を読み、1つの記事を囲んで意見や感想を述べ合うことのできるよいチャンスとなった。また、小学校の部で「学校優秀賞」をいただいたことは小学生共有の財産になった。

4. 最後に

校内でNIEのコンクールを考えていたが実現できなかった。今年度も新聞に触れる経験値を高めるに留まり、活用しようとする態度を育てるまでに至らなかった。ただ新聞の良さを知った児童生徒が多く見受けられる。また少数ではあるが先のプレゼンを行った2年生児童のように新聞を活用して英語を学ぶなどの活用方法を知った児童もいる。このことをチャンスとしてまた次年度以降、NIEを展開していきたい。

(担当 教諭 石川 明子)

LHR、課外の講習等での新聞の活用

～広い世界に自分を位置づけ、異なった意見を認め合い共に学び合う集団作りを目指して～

1. はじめに

平成 25、26 年度の 2 年間 N I E の研究協力校・実践校の指定を頂き、次の 2 点をねらいとして実践を行った。

(1) 新聞を活用して、生徒たちがより広い世界に自分を位置づけ、社会と自分の関わりを明確にすることで進路を選択すること

(2) 新聞を活用する中で異なった互いの意見を認め合い、共に学び合う集団を作ること

ただ学年では、平成 24 年度から毎日クラスに 1 部ずつ新聞を取って活用してきており、研究協力校・実践校の指定を頂いた平成 25 年度もクラスに 1 部ずつ、26 年度にはコースによっては複数紙を読むことができるよう廊下の新聞コーナーに 4 紙 (2 紙×2 フロアー) を準備するなど、新聞が普段の学校生活の中にある環境を整えてきた。

2. 課題と取り組みについて

(1) 個人の課題について

本校では高校 2 年生で希望進路別にコースが編成され、生徒たちは職業観や勤労観を深めながら、志望大学・学部・学科をより明確にしていく。そして年度末までには全員が自らの考えを志望理由書にまとめて書き上げることになる。書き上げた志望理由書をもとにより具体的な希望進路別にクラスが編成される 3 年生では保護者、教員と相談を重ねながら進学する大学・学部・学科を明確にして受験の準備を進める。

1 年時までの生徒の様子を見て、平成 25 年度には、自らの経験の範囲内に留まらず、視野を広げ、自らを広い世界や社会に位置づけて自らの考えを定める力を伸ばすことを目標に実践を行った。例えば、今年度は昨年度の成果と反省を踏まえ、生徒が、教員や弁護士、医師や技術者等これまでの経験の中で接してきたものや資格を必要とする「分か

りやすい」ものに偏らず職業観を持つことができるようにと考えて実践を行った。

(2) 集団の課題について

1 年時までの生徒の様子を見て、平成 25 年度には自らの考えや意見を明確に仲間に伝えること、やり取りを通して互いの考えを磨く力を伸ばすことを目標に実践を行った。今年度は他者にしっかりと向き合い自らの意見を明確に表明したり、相手の意見や考えをしっかりと受け止め自らの考えを磨いたり一つの考えにまとめる力を一層高めることを目標に実践を行った。

3. 指導體制について

研究指定を受けた 2 年間、学年団の中に担当者 (4 名) を置き、指導計画の立案、実際の指導を行うことにした。また、志望進路別のすべてのコースに属する 400 名弱が上記の力を高められるように、実践は教科の指導の中に求めるのではなく、LHR と課外の講習、また休み時間や家庭での取り組みの中で考え、行うことにした。特に、「記事を選び、記事について考えたことや思いを伝え合うことで、相互理解を深め、自分自身を受容する力を高めること」を最重要課題とし、企画・立案、実施をすることにした。

4. 実践内容

(1) 平成 25 年度

① 研修旅行の事前学習での活用

本校では、12 月の初旬に 3 泊 4 日の日程で、希望進路別のコースごとに沖縄、長崎、広島・関西で平和学習、進路体験学習、異文化理解学習を柱とする研修を行っている。10 月頃から行われる事前学習で、情報を共有するために新聞を活用した。具体的には、8 月の広島・長崎の原爆の日、終戦の日前後に配達された、朝日、読売、毎日、日経、産経、河北新報の各紙から研修旅行委員が情報を共有したほうがよい判断した記事を切り抜き、ラミネートしたものを廊下 2 箇所それぞれ掲示して学習に利用した。また、コースでの平和学習に役立つと

考えられる記事をコピーして配布し、研修ファイルに入れて各自目を通し、研修地での学習に活用するようにもした。



【廊下の掲示】



【ファイル用の新聞記事】

②小論文講習での活用

2学期に設定された40名弱の生徒が参加する小論文の講習で、自らの答案を添削したり書き直しをする際の材料として新聞記事を活用した。講習は基本的に4回を1セットとし、1回目の講習で答案を作成し、回収して教員が目を通した後、2回目の講習で各自が記述を深める材料となるような記事を複数コピーして配布して目を通させ、自分の意見や考えと比較させ、メモを作らせたり添削をさせたりした。



【新聞記事の切り抜きの様子】

③「3Lリレーノート」での活用

係りが週に一つ新聞記事を選び、設定したテーマについて一人ひとりが考えや感想を記しながら6～7人で編成された班の中でノートを回し、仲間の考えを受け止め、自分の考えを磨いていく意見交換ノート＝「3Lリレーノート」での新聞記事の活用を実施した。B5の大学ノートの左側に記事のコピーにテーマを記したプリントを貼付し、左ページに順に自分の意見を記していき、一巡したところで再度仲間の記述を読んで自分がどのように所与のテーマについて考えたかを記し、個人として、班として考えを深めていくという取り組みである。ノートに目を通し、組担任を中心とした教員が適宜助言することで記事に関連する新たなテーマについて意見を交換することもあった。



【リレーノート】

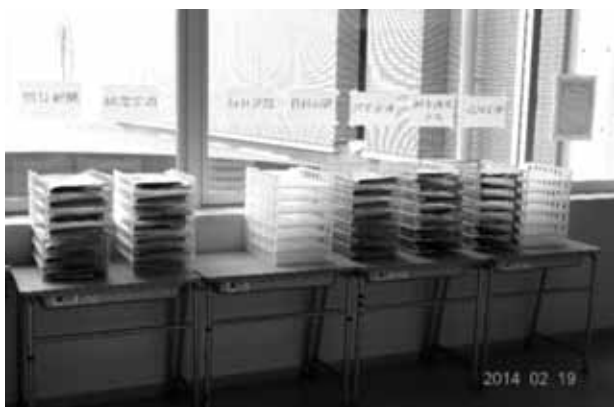


【リレーノート】

(2) 平成 26 年度

①小論文作成での活用

推薦で大学に進学することを希望する生徒が集まるコース（150名ほど）で、入試小論文の作成練習に際し、新聞記事を活用した。具体的には、課題文型の小論文の作成の際、立論の根拠として廊下に取り貯めた新聞から一人ひとり相応しい記事を探し、内容を要約して答案に盛り込み、より説得力のある小論文にするために活用した。



【廊下のNIEコーナー】



【教室のNIEコーナー】

②小論文講習での活用

昨年度に引き続き、課外の小論文講習で、自らの小論文の記述内容を深めるために新聞記事を活用した。昨年度同様、講習は基本的に4回を1セットとし、1回目の講習で答案を作成し、回収して教員が目を通した後、2回目の講習で、特に各自が立論の根拠となる具体例を、取り貯めた新聞から一人ひとり相応しい記事から探し、答案に盛り込むように指導した。



【記事を探す様子】

③「3Lリレーノート」での活用

昨年度に引き続き標記のノートを作る際に新聞記事を活用した。今年度は2つのステップを取った。各クラス5～6名の班を編成し、ステップ1では、クラス2名の新聞係りがそれぞれクラスの仲間に是非知ってほしい課題を含む記事を切り抜いて担当の先生に渡しコピーしてもらおう。コピーをノートの見開きページの左側に貼付し、右側に自分の意見を記しながら班の中で回し、期間の最後に担当の先生に提出してコメントをもらおう。ステップ2では、一人ひとりが班の仲間に是非知ってほしい課題を含む記事を切り抜いて1冊のノートの左側に貼付し、右側に自分の意見を記しながら、班の中で回した。

平成 26 年度「3Lリレーノート」実施要領

1. ねらい

- ・記事の選定作業を通して、広く社会に目を開く機会を持つ。
- ・ノートへの記述を通して、自分の考えを分かりやすく表現する力を高める機会を持つ。
- ・仲間の意見を読んで、他者の意見を受け止め自分の考えを磨く糧とする機会を持つ。
- ・異なった互いの意見を認め合うことで、共に学び合う集団を作る機会とする。

2. 方法

ステップ1

- ①各クラス5～6名の班を編成する。班のまとめ役を1名決める。
- ②各クラス2名の新聞係りを決める。
- ③新聞係りは、クラスの仲間に是非知ってほしい課題を含む記事を切り抜く。
※NIEコーナーの新聞記事を活用します。一部事務室の新聞を活用させて頂く予定です。
- ④切り抜いた記事を担当の先生に渡す。
※「記事を読んで考えたことを記そう」ではなく、記事の中の「このことについて考えてほしい」という場合には、そのことを紙に記して担当の先生に伝える。
- ⑤担当の先生がコピーした記事を準備したノート（大学ノート）の見開きページの左側に貼付する。
- ⑥見開きページの右側に自分の意見を記しながら、班の中で回す。
- ⑦期間の最後に担当の先生に提出して、コメントを頂く。

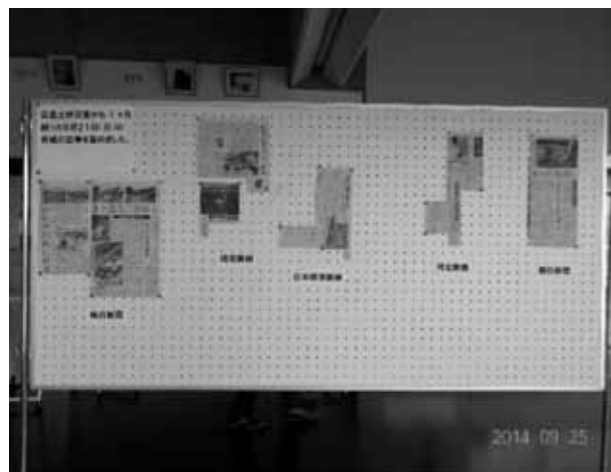
ステップ2

- ①一人ひとりが班の仲間に是非知ってほしい課題を含む記事を切り抜く。
※NIEコーナーの新聞記事を活用します。一部事務室の新聞を活用させて頂く予定です。
- ②切り抜いた記事をノート（大学ノート）の見開きページの左側に貼付する。
- ③見開きページの右側に自分の意見を記しながら、班の中で回す。
- ④期間の最後に担当の先生に提出して、コメントを頂く。

④学年外での活用

a 『広島土砂災害支援募金活動』での活用

生徒会執行部と有志が8月に広島で起きた土砂災害支援の募金活動を行う際に、学校全体で情報を共有するために新聞記事を全校生徒が集まる礼拝堂前に掲示し活用した。



【礼拝堂前の掲示と募金の様子】

b 『NHK 杯全国高校放送コンテスト』出品作品での活用について放送部がテーマとしてNIEを取り上げ、宮城県NIE委員会事務局の方のご協力を頂き、コンテストに作品を出品した。

5. 成果と課題

(1) 平成 25 年度

①成果

●研修旅行事前学習での活用

近くで起きた出来事と過去の事実を結び付けてより当事者性を持って考えることができるようになったこと、記事を読んで考えることを通して学年全体で課題を共有できるようになったことが挙げられる。



【情報共有の様子】



【情報共有の様子（事後報告会）】

●小論文講習での活用

他者の考えや他の関連する事実と自らの考えを結びつけ深められるようになったことが挙げられる。



【記事を探す様子】

●「3Lリレーノート」での活用

根拠を明確にして自らの考えを表明し、加えて相手の考えと違いを正確に評価した上で自らの考えを深めることができるようになったこと、互いにしっかり話し、聞き合う雰囲気が学年の中に醸

成されつつあることが挙げられる。

②課題

小論文講習での新聞記事の活用と「3Lリレーノート」の取り組みを継続することによって、より生徒の視野を広げること、他者の考えを糧に自らの考えを深める力を携えさせること、より組織的にこれらの取り組みを実施することができるよう体制を見直すことが挙げられる。

(2) 平成 26 年度

①成果

●小論文作成での活用

社会で起きている事件や出来事が与えられた論文の課題と結びつくことの理解を通して、改めて物事のつながりに気づき、より具体的に考えることが出来るようになったことが成果として挙げられる。



【廊下の新聞ストック】

●小論文講習での活用

視野を広げ、加えて自らの考えからより遠くにあると思われる事件や他者の考えと自分の意見や考えを結びつけて、それらを深められるようになったことが挙げられる。

●「3Lリレーノート」での活用

記事の選択を通して、自分の興味関心や考えを明確に仲間に伝える力を養い、加えて多くの仲間の興味関心と世の中の課題に向き合い視野を広げ、自分の意見をすることができたことが挙げられる。



【廊下に掲示した委嘱状】

②課題

特に小論文作成の際に新聞記事を活用することを通して気づいた諸事象間のつながりについての視点と具体的に考える力を生徒が今後も持ち続けていくための働きかけをどのようにするかということ、また特にリレーノートへの取り組みを通して携えた広く世の中に横たわる課題に向き合う力と自分の意見を具体的に持ちそれを相手に明確に伝える、相手の意見をしっかりと受け止め自分の考えを磨く力を、特に進路先で出会う新たな人間関係の中で発揮するための仕掛けをどのようにするかということが挙げられる。

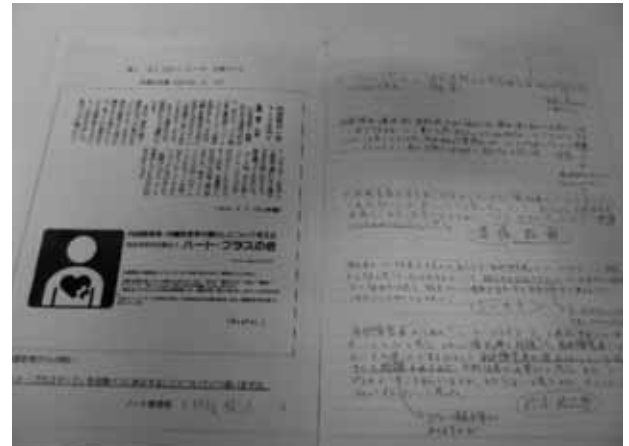


【職員室内のNIEコーナー】

6. まとめ

25、26年の2年間の実践を通して、日常生活の中に新聞があり新聞を通して世の中と自分や仲間が繋がっているという気付きを生徒が携えることができたと考えている。生徒との何気ない会話の中で耳にした「朝普通に新聞に目を通して記事について友達と話す」という言葉がそのことを如実に物語っていると思われる。今後は進路先の新たな環境や人間関

係の中で、また人生の歩みとともに変化する興味関心に沿ってさらに多くの記事に目を向け、出来事の間につながりに気づき自分の考えを磨く力を高め仲間との意見交換や議論を深められるようになることを期待する。そのためにも、今後彼らが日常生活に新聞がある環境に身を置き続けていくことが大切であると考えている。



【リレーノート】

一方で、一緒に実践に取り組んだ教員との話しいや作業を通して、個人の実践では決して得ることのできないであろう多くの工夫や学びを得られたことは大変に嬉しいことであった。今後それぞれが別の学年や生徒を担当する際に今回の経験を活かし、取り組みに磨きを掛けさらに新たな実践に繋げていきたいと考えている。

末筆になりますが、このような機会を与えて頂きまた実践にお力添えを頂いた宮城県NIE事務局の方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。

(担当 教諭 柴田 隆一)

「新聞に親しみ、自分の考えを表現する児童の育成」

～新聞の効果的な活用を通して～

I はじめに

本校では、平成 24 年度から 2 年間、NIE 研究協力実践校として、また、今年度は、奨励校として、新聞に親しみ、自分の考えをもって表現する児童の育成を目指して実践を行ってきた。

II 昨年度までの取組

1 教員研修

河北新報教育プロジェクト事務局の方々をお招きし、記事の見方、新聞の見方、見出しのつけ方などについて、実際の新聞を活用しながら分かりやすく説明をしていただいた。

2 環境整備

職員室前廊下に、吉岡小学校にかかわる新聞記事や最近話題の新聞記事を切りぬき、コメントをつける形で記事を紹介するとともに、新聞に慣れ親しめるような環境作りを行った。

また、各教室に配布した新聞をストックする場所を決め、教室に新聞が配布されていないクラスでも、各種の新聞を自由に手に取り、授業や日常活動にいつでも活用できるようにした。



NIEコーナー

3 授業での取り組み

(1) NIE 指導部の設定

校内研究を教科・領域別の研究とし、NIE 指導部を設定した。学年から 1 名ずつ NIE 指導部に所属し、学年のリーダーとして NIE を広めることができるような仕組みを取り入れた。

以下の 3 つを研究の視点にして取り組んだ。

視点①—【課題提示の工夫】児童が主体的に学び課題を解決するための工夫

視点②—【学習過程の工夫】児童に自分の思いや考えをもたせるための(受信する)工夫

視点③—【言語活動の場の設定】児童が自分の思いや考えを伝え深めるための(発信する)工夫

(2) 各学年の実践授業

1 年生

○教科名 国語

○単元名 「ひらがなをさがそう」

2 年生

○教科名 創意

○題材名 「新聞に親しもう」

4 年生

○教科名 学級活動

○題材名 「新聞の見出しですごろくをしよう」

5 年生

○教科名 道徳 (情報モラル)

○題材名 「気をつけよう携帯電話」

6 年生

○教科名 社会

○単元名 「わたしたちの生活と政治」

III 今年度の取組

今年度は、昨年度に引き続き以下の取り組みを行った。

1 NIE コーナーの設置

NIE 予算でテーブルを購入し、新聞コーナーを職員室前に設置した。児童が自由に新聞を読むことができる環境を充実させた。

2 授業での各学年の取り組み

2 年生

○教科名 国語

○単元名 「知っていることばをさがしてみよう」

○内容：国語で学習した漢字を、新聞の中から探す活動を行った。

○成果：全ての記事に漢字表記が見られるため、児童へ探し方や探す場所への視点を与えること、また、指導者が精選した紙面に取



り組ませるよう配慮した。今まで学習した漢字

だけでも、新聞紙上に多く使われていることに気づき、同時に、記事の内容の大体を読み取る児童も見られた。

3年生

○教科名 学級活動

○題材名 「新聞写真集を作ろう」

○内容：新聞記事から自分の気に入った写真を選び、新聞名、日付、リードを読み取って記録し、自分



がなぜその写真を選んだのかを書いた。友だち同士で見せ合い、代表者が全体で紹介した。

○成果：普段新聞記事に目を通したことがない子がほとんどだったが、日付やリードなど新聞のつくりについて知ることができた。また、新聞にはいろいろな記事が掲載されていることにも気付くことができた。



4年生

○教科名 総合的な学習の時間

○題材名 「新聞記事を作ろう」

○内容：自分たちで調べたことを記事として、グループごとに見出しに気を付けた新聞作りを行った。



○成果：自ら取材したことを紙面にまとめることで表現する力を身に付けることができた。情報

モラルについても、ニュースで取り上げられることが多いツイッターやフェイスブックなどSNS



Sに関わるトラブルの記事を紹介することで子どもたちが身近な危険性に気付くことができた。また、一つ一つの事件や問題になっていることを取り上げた記事により、じっくりと解説し

ながらみんなで考えることができたのも効果的であった。

5年生

○教科名 国語

○単元名 「新聞記事を読み比べよう」

○内容：新聞記事を読み比べて、書き手の意図を読み取るために、「見出し当てクイズ」を行った。



①2人1組になって、用意した新聞記事とその写真を交換し合う。

②渡されたら、その記事の内容や写真に合った見出しを考えて書く。

③もともと新聞に掲載されていた見出しとどのくらい近かったかを互いに話し合い点数を付ける。

○成果：クイズ形式にすることで参加する意欲が増した。単に「当たった」「はずれた」だけでなく、考えた見出しと新聞の見出しを比較して良さや工夫を話し合うよう指導したので、書き手の意図やメッセージをつかむ力が付いた。



IV 成果と課題

NIEの実践3年目ということで、児童の活字に対する抵抗感が減り、積極的に新聞を読む姿が見られた。また、児童同士で記事について話し合うなど、考える力やコミュニケーション力が向上した。

現在、我々は高度情報化社会の中で生活している。取り入れる情報を取捨選択し、能動的に考えていくことがいっそう重要になってくる。今後も、新聞を身近な情報ツールとして学校現場で活用していくことが必要不可欠と考えている。

(担当 教諭 阪元 啓介)

新聞を活用し、「読む力」「考える力」「表現する力」を育てる

1 はじめに

本年度は、実践3年目を迎え、「読む」(情報を整理分析する力)、「考える」(情報・事象について自分の考えを持つ力)、「表現する」(自分の考えを話す・書く力)の中でも、校内研究(国語科)の「伝え合う力」との関連を図り、「表現する」に重点をおいて実践してきた。

2 実践の概要

1) N I Eにかかわる環境構成

(1) N I Eコーナーの設置

①設置場所 職員室前掲示板、各階廊下掲示板

②掲示内容

- ・新聞記事
- ・新聞タイム賞作品
- ・お知らせ、案内



(2) 新聞コーナーの設置

①設置場所 図書室・3～6年教室

- ・新聞は各教室と、図書室に配置。
- ・知らせたい新聞記事
- ・新聞スクラップ等



2) 常時活動

(1) 新聞タイム

毎週木曜日の業前活動として行っている新聞タイムには、新聞タイムA・B・C・Sと4種類あり、それぞれ次のような内容である。

①新聞タイムA

担任が新聞記事を選択し、プリントを作成する。その記事に対して、児童が感想等を記入する。感想を交流し合う。



【新聞タイムA-5年】

②新聞タイムB

児童が新聞記事をスクラップし、感想を書いて学校に持ってくる。記事と感想を紹介し合う。

③新聞タイムC

Aとの違いは、家の人の感想欄が付いているところである。学校で自分の感想を書き、家の人に記事と児童の感想を読んでもらう。更に自分の感想を記入して学校に提出する。

④新聞タイムS

新聞記事から担当が人物写真を切り取り、プリントを作成する。児童は、自分でテーマを作り、吹き出しを使って誌上討論会を完成させる。



【新聞タイムの様子 5年】

(2) 学級での活動

学級での朝の会や帰りの会で、児童や担任による記事の紹介等を行っている。

3) 授業における新聞活用

○新聞作成

授業における新聞活用(新聞記事を活用した授業づくり)を継続している。特に、表現力の育成に重点をおいた本年度は、新聞作成にも力を入れた。

●登米市未来新聞コンクールへの応募

<新聞づくりの手順>

①登米市の現在の課題や将来的課題について新聞記事やインターネットを通して調べたり、聞いたりしながら6年生全体で話し合った。少子高齢化に伴う人口減少に歯止めをかけたいとの思いから、次の4つ「発展」、「福祉」、「環境」、「イベント」を作成のテーマとした。

②グループ毎に、テーマを一つ選択し、市の課題に対する解決方策を考えた。

③出前授業で学んだことを参考に、記事の書き方を考え、記者になったつもりで、未来の登米市の姿を想像し、客観的に文章にまとめた。自分の思いは、架空の人物にインタビュー



【編集会議】

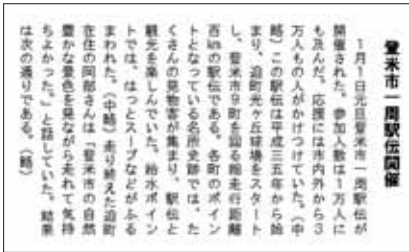
として代弁させるようにした。

- ③新聞のレイアウトやリード文を考えたり、読み手に伝えたい順に記事をレイアウトしたりした。写真の代わりに未来を想像し記事に合う挿絵を入れた。

※コンクールにおいて審査員特別賞を受賞した。

●その他の新聞

- ①教科学習における学習のまとめとしての新聞・国語科、社会科、理科



【記事抜粋—登米イベント未来新聞より】

- ②総合的な学習における学習のまとめの新聞

- ③行事等の思い出を残すための新聞

・花山合宿、修学旅行

- ④学級新聞



4) 家庭での取組

(1) 日常の取組

- ①新聞タイムB…全学年対象 (記事スクラップと感想記入)

- ②新聞コラム (河北春秋)…高学年対象 (視写)

(2) 長期休業中の取組

- ①すてきな写真探し…下学年対象 (スクラップ)

- ②記事スクラップ…上学年対象



【完成した未来新聞】

- ③いっしょに読もう新聞コンクール応募…上学年

※26年度学校奨励賞受賞

- ④河北新報新聞記事コンクール応募…高学年対象

※24年度6年児童優秀賞受賞

※25年度5年児童論説委員長賞受賞

6年児童優秀賞受賞

5) N I Eを起点とした広がり

○新聞記事から募金活動へ

昨年度は新聞タイムを起点として、児童会を中心として「フィリピン台風絆募金」を実施した。本年度は、夏休みの新聞記事コンクール(河北新報社主催)への応募作品を起点として募金活動へと繋がった。

●広島土砂災害支援募金

<広がりの様子>

広島土砂災害の記事を読んだ児童数名が作文の中に「自分たちの手で少しでも手助けしたいので、今年度は広島土砂災害に対して募金活動を行ってはどうか」という趣旨のことを書いていた。

このことを児童会の中心である企画委員会に紹介し、企画委員会で募金活動の原案を立て、代表委員会で話し合った。全会一致で本年度の募金を広島に送ることを決定した。

児童は、募金活動のチラシを作り、全校児童に配布した。プルタブや空き缶を集め、学習参観日には、企画委員が保護者を対象に募金活動を行った。

集まったプルタブと空き缶を換金〔3,592円〕し、募金(12,651円)と合わせ、計16,243円を1月8日に日本赤十字社の窓口である市役所を通して、広島土砂災害募金として送った。

募金活動が教師や大人の発案ではなく、新聞記事を起点とし、児童自らというところに意義があり、より自発的・積極的な活動となった。すでに、児童は次年度の活動に思いをはせている。

6) 保護者への啓発

N I E通信での活動内容の発信、新聞タイムの講座などを行っている。

7) 児童・職員の研修

- ①6月 職員N I Eオリエンテーリング
3・4年新聞オリエンテーリング
5年新聞学習(国語科)

- ②7月 N I E全国大会(1名参加)

- ③9月 新聞作り研修会(6年生対象出前教室)

- ④10月 N I E県大会参加(1名参加)

※N I E工房随時参加

4 おわりに

本年度で新聞の無料提供も終わり、活動の縮小も避けられないのが現実である。しかし一方で、私たちは、児童の世の中での出来事に興味・関心を示している姿が数多く見受けられ、それに伴って読む力や表現する力が育ってきていることを実感している。また、N I Eの様々な有効性を知り、保護者のアンケートや会話からN I Eの継続を望む声が多い。

そこで、次年度以降も「新聞タイム」を中心としながら、授業での新聞活用、新聞づくりなど、活動の成果として評価できる取組を我が校の特色ある活動として、継続していきたいと考えている。

(担当 教諭 小山 順一)

新聞に興味を持ち、進んで親しむ児童の育成

1 はじめに

インターネットの普及と反比例するように若年層を中心に新聞離れが進んでいる。本校においても例外ではなく、「新聞を見ない、読まない。」「家でとっていない。」などの理由で新聞に触れることの少ない児童が多くなっている。

新聞には、新しい情報が入手できるという重要な役割がある。さらに活字に目を通すことによって文字を身近に感じたり、文章を読み取ることによって読解力を身に付けたりするという働きも持っている。

そこで、本校では、「新聞に興味を持ち 進んで親しむ児童の育成」をテーマとして設定し、平成 26 年度から N I E の実践に取り組むこととした。本年度は、「新聞に興味を持たせ、より身近に感じさせること」を念頭に実践を進めていきたいと考えた。

2 実践の概要

(1) 環境づくり

【N I E ひろば】

校舎 2 階の中央に位置する特別教室とその廊下に、「N I E ひろば」を設定し、いつでも新聞を見ることができ、読むことができる環境をつくってきた。日々、届けられる新聞（河北新報、朝日新聞、日経新聞、産経新聞、毎日新聞、読売新聞）を整理し、廊下には「今日の新聞」、教室には「昨日の新聞」を並べ、児童が日常的に興味を持って見ること、読むことができる環境をつくった。



【新聞記事あてクイズ】

随時、記事と写真を組み合わせる「新聞記事あてクイズ」などを実施し、児童の新聞への興味・関心を高めた。



(2) 教員研修

河北新報社教育プロジェクト事務局長の砂金慎氏、宮城県 N I E 委員会コーディネーターの齋藤昭雄氏をお招きし、新聞活用オリエンテーションや研究の取り組み方についての研修会を行った。

(3) 朝の会での新聞の活用

教師が選んだ記事を朝の会で紹介する場を設けた。その記事を選んだ理由や感想、6 社の新聞の第 1 面の記事の見出しなどを紹介し、児童の興味・関心を高めた。



(4) 授業での新聞の活用

【1、2 年 創意「すてきなしゃしんさがし」】

新聞を使う活動に児童から喜びの声があがった。プリントに自分の気に入った写真を切り取っては、その写真を選んだ理由や感想を書かせた。

気に入った写真を探す活動では、新聞をめくりながら、「おもしろそうな写真だね。」「どれにしようかな。」などの声が聞かれた。写真を決めてからは、その理由や感想を考えながら自分の思いを書いていた。

グループや全体で発表し合い、興味がある写真やインパクトのある写真の発表に驚きや歓声があがった。この活動を通して、新聞は大人の見るというイメージから児童に新聞を身近に感じさせることができた。



【3年 総合「すてきな写真さがし」】

新聞を読んだり、新聞に触れたりする機会の少ない児童が多かったことから、少しでも新聞に興味を持たせようと、総合的な学習の時間に「すてきな写真さがし」を行った。新聞の中の写真から、自分が興味を持ったものを1枚選び、選んだ理由やその写真を見て感じたことをまとめさせた。児童は、好きな写真を探す活動に楽しみながら取り組んだ。

本学習後、自分で「新聞ノート」を作成し、家庭で購読している新聞の中から気に入った写真を切り取りノートにはるといという活動に発展していった。

【4年 国語「みんなで新聞をつくろう」】

「みんなで新聞をつくろう」では、身の回りの出来事を新聞にする学習活動を通して、新聞に慣れ親しんだ。単元のまとめの段階では、新聞を活用し、いろいろな新聞社の記事を見たり読んだりしながら、題字や一面記事、自分が興味を持った新聞記事、気に入った写真、国名などを探し出していた。

この活動を通して、児童は、新聞には非常に豊富な情報が含まれていることに気づいた。児童は、新聞に興味を持って、記事を探す活動に積極的に取り組んでいた。また、新聞の構造などに気がつくことができた児童もいた。



【5年 創意「ことばの貯金箱」】

児童に、「優しくあたたかい気持ちになることばを意識させる」というねらいで取り組んだ。児童は、「記事の見出しや写真などから、幸せな気持ちになることば、写真を探す」をテーマとして学習に取り組んだ。児童は自分なりの「幸せ」の視点を持ち、記事や写真をどんどん切り取っていた。ことばの貯金箱シートには、記事の配置にも一人一人のこだわりや思いが表れていた。グループで同じことばを見つけていたことに喜んだり、友達の切り抜きに「これ、いいね。」と言いつつたりして、作品を通して児童同士が心を通わせている場面も多く見られた。

ことばの貯金箱の実践では、自己表現活動としての有効性を感じた。



【5年 社会「工業生産と工業地域」】

本単元のまとめの段階で、主に日経新聞を活用し、「工業生産」をキーワードとした「工業生産スクラップブックづくり」に取り組んだ。児童の多くは前単元で学習した「自動車をつくる工業」の関連記事や写真、また「時計」や「カメラ」、「家庭電気製品」などの身近な工業製品関連の記事や写真を見つけ、自分の「工業製品スクラップブックづくり」に楽しそうに取り組んでいた。その中に書かれていた感想には、「新聞にはいろいろな記事があって驚いた。」「スクラップブックを初めてつくったけれど、資料集めには新聞が便利だった。」など、新聞に対する新しい気づきが書かれていた。



【5年 国語「物語のおもしろさを考えて読む」】

発展学習として、新聞に掲載されている「図書の広告欄」を活用し、印象に残った本の題名や購入したくなった本の題名などをノートにたくさん書き出す活動を行った。その本の題名を選んだ理由や気づいたことなどをまとめさせながら、「題名の付け方や題名に込められた意味」について考えさせることができた。



3 次年度に向けて

- ・N I Eの実践にむけて、校内組織を再構築し、全学年の児童が日常的に楽しく取り組んでいくことのできるような体制づくりを行う。
- ・N I Eの活動を関連する各教科等のカリキュラムの中で整理し、計画的に実践できるようにする。
- ・学級活動や児童会活動において、児童による自主的、実践的な活動ができるようにしていく。
- ・新聞を活用した授業実践について、教員研修を行い、N I Eの活動への意識と意欲の向上を図る。

(担当 教諭 藤澤 雪彦)

新聞に親しみ、活用しようとする児童の育成

1 はじめに

本校では、新聞に親しみ、活用し、「読む力」「考える力」「表現する力」を育てることを目的にNIE実践に取り組んでいる。1年目の26年度は、まず、児童を新聞に慣れ親しませることを主眼に置き、3年生以上の児童を対象にNIEの実践を行った。



「心に残ることば集め」



「これでいいかな」

2 今年度の取組

(1) 業前を活用した新聞を読む時間の確保

教室に新聞を置き、常に読めるようにした。業前などに新聞を読む時間を確保して新聞に親しめる環境を整えた。



「ことばの貯金箱」完成(3年)

(2) 朝の会・帰りの会での記事紹介

教師や日直やニュース係の児童がその日の新聞の中から気になった記事やみんなに読んでほしい記事を紹介した。紹介したい新聞記事の要点と自分の感想を書き、紹介後廊下に掲示し、学級以外の児童にも紹介した。



今日、「ことばの貯金箱」をやりました。気に入っている言葉は、「東北は、ひとつ」です。「船」「新幹線」「錦織選手」の写真を見つけて、一緒に貼りました。作業をしている時間は、すごく楽しかったです。
(左の児童作文からの抜粋)

(4) 新聞記事のスクラップ

児童一人一人が新聞を読んで、みんなに紹介したい記事を切り抜きまとめる。まとめる時はオリジナルの見出しを付け、新聞記事を読んだ感想や自分の考えを書く。できあがったスクラップは児童同士で交換し、スクラップを読んだ感想を書く等、様々な記事に関心を持つように工夫した。

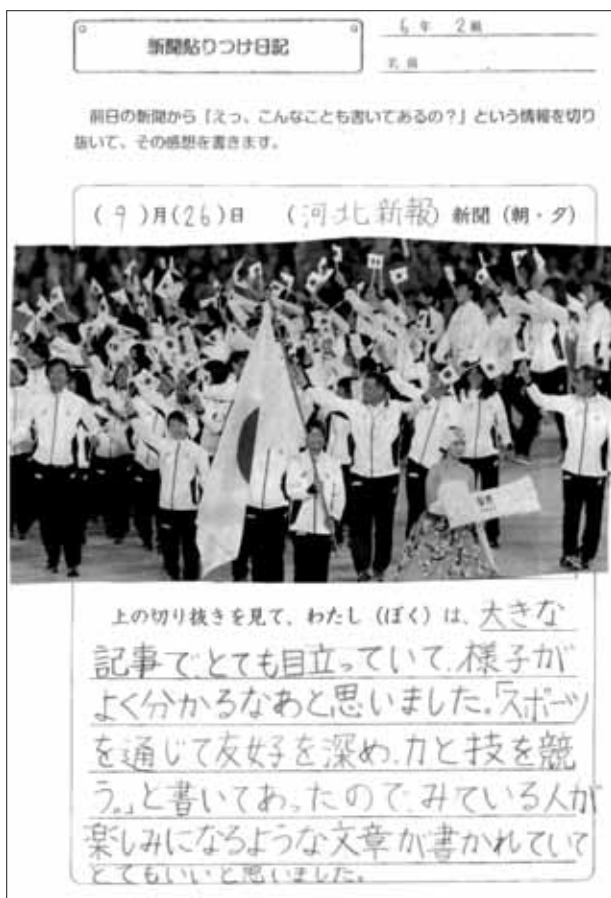
(3) ことばの貯金箱

どの学年も「ことばの貯金箱」に取り組んだ。その都度、切り抜き、ストックしておいたお気に入りの「ことば」や「写真」を自由に貼り、自分の思いを表現した。互いに作品を紹介し合うことで、友達の思いや考えを知ることができた。



(5) 新聞貼りつけ日記 (高学年)

新聞の切り抜きを資料にしたミニ日記を書く。考察の文の書き方としては、①感じたことをズバリと一言で書く。②感じたことのもとになっている文を引用する。③引用の後に理由づけの文を書く。このコツを使って、新聞から情報を切り抜き、その感想を書かせた。



(6) 河北新報「NIEにチャレンジ」の活用

毎週月曜日の河北新報の記事「NIEにチャレンジ」にクラス全員で取り組んだ。新聞記事を読んで設問に答えたり、自分の考えを書いたりした。

(7) 環境整備

新聞に興味を持たせるために新聞の良さのPR文と記事を廊下や教室に掲示するなど、常に多くの児童の目に触れるように場を設定した。新聞委員会が中心となって、新聞記事を切り抜き、記事の紹介を行った。



「新聞の良さを紹介したPR文」



「教室掲示」

←「新聞委員会による記事の紹介」

3 成果と課題

<成果>

- ・常に新聞が読める環境を作ったことで、自発的に新聞を読む児童が出てきた。
- ・児童の好みによって読む記事に偏りがあったが係や教師が紹介することで様々なジャンルの記事に興味を持ち、読むことができた。
- ・「ことばの貯金箱」「スクラップ」等で、記事を切り貼りし感想を書くといった活動を行ったことで、普段新聞に親しむ機会のない児童も、記事に興味を持ち活動に取り組むことができた。
- ・「NIEにチャレンジ」の活用は、文章だけでなく、写真も載っているので児童は意欲的に取り組むことができた。さまざまなジャンルの記事を題材にしているので良かった。

<課題>

- ・新聞を読むことに抵抗がある児童にとっては、友達が紹介してくれた記事であっても、なかなか読んでみようという気持ちにならないようだ。そういった児童も興味を持って記事を読むことができるような手立てを考えていきたい。
- ・「NIEにチャレンジ」の活用は、内容によっては、小学生には難しいものもあった。内容をよく吟味する必要がある。

(担当 教諭 小笠原英世)

生徒たちの興味・関心を引き出す新聞 ～N I E初年度～

1 はじめに

夏休みの終わり、我々教職員に対してのN I E研修が行われた。2年計画のN I E活動によって生徒たちがどのように変容していくのか。また、どのようにして変容させることができるのか。新しい活動を進めていく難しさはあるが、「気楽に実践してほしい」という河北新報社のお言葉を糧に活動を継続している。

相手意識や目的意識を明確にし、自分の考えを豊かに表現する力を身に付けることは、社会生活で重要なことである。今日、言語活動の充実が重要な改善点として位置付けられており、言語活動の基礎・基本を支える研究は今後ますます発展していくと思われる。N I Eは生徒たちの表現力を高める有効な方法であると捉え、全学年で実践する。

2 N I E 実践計画 (1 年目)

次のように校内目標を設定した。1年目は、「新聞に親しみを持たせながら生徒たちの興味・関心を引き出す」こと、2年目は、「新聞の活用を通して、思考・判断・表現の力を身に付けさせる」こととしている。

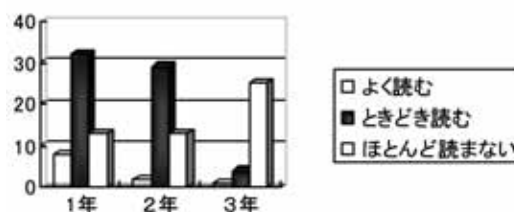
月	内 容
9	・N I E ガイダンス ・N I E コーナーの設置 (各学年廊下) ・個人新聞づくり
10	・N I E コーナーの設置 (生徒玄関前) ・第1回N I E アンケート調査 ・「朝のスピーチ」ガイダンス
11	・第1回「ことばの貯金箱」 ・第1回「朝のスピーチ」開始 (～12月)
12	・新聞記事を使った道徳授業
1	・第2回「朝のスピーチ」開始 (～2月) ・「先生の気になるニュース」開始 (～3月) ・「記事を集めて世界を知ろう」の実践
2	・「1枚の写真から文章を書く」の実践 ・第2回「ことばの貯金箱」 ・第2回N I E アンケート調査
3	・新聞記事を使った道徳授業 ・N I E 活動の感想を書く

3 生徒の実態

「新聞等の活用に関するアンケート調査」を10月3日に行った。この結果を踏まえてN I E活動を進めているところだが、2月に再度同様の調査を行うので、変容が見られることを期待している。

<アンケートの1項目>

⑧宮中学校ではN I E 活動の一環として、学校で新聞を自由に読めるようにしています。あなたは学校で新聞を読んでいますか。 (単位：人)



<アンケート結果の考察>

- ①家庭で新聞を読むことは少ない。
- ②新聞を読むことが多い生徒も学年が上がるにつれ新聞を読む回数が減る。
- ③どの学年でも「N I E」を知らない生徒の方が多い。「N I E」を知っている割合は、2年生では約半数、3年生では3分の1、1年生についてはほとんど知らない。朝の会を中心にN I Eの目的や意義を伝えていくことを先生方をお願いしたい。
- ④新聞で読む記事について最も多いのが、1年生ではテレビ欄、2年生ではスポーツ欄、3年生では1面と社会面である。学年が上がるにつれ分散していく傾向にある。
- ⑤よく読む記事と興味関心は関連しているが、興味関心があってもその記事を読まない。興味関心のある記事を紹介したり、記事を紹介することで興味関心を引きだしたりするよう取り組みを工夫する。
- ⑥さまざまな面で新聞が役立つと思っている。世の中の動向を知る意味を感じている生徒は多い。身近な地域について興味を持たせることは課題である。

- ⑦学年が上がるにつれ、新聞が学習に役立つと思う割合が大きくなる。
- ⑧学年が上がるにつれ、学校で新聞を読まなくなる傾向にある。1、2年生と3年生の間に顕著な差が見られる。新聞コーナーを各学年に設置すること、新聞の部数を確保すること、朝読書の時間を利用することなどの取り組みを工夫したい。
- ⑨ほとんどの生徒が新聞を読んで「なるほど」と学習できている。1年生には、読みやすい記事を紹介するなどのわかりやすい取り組みも必要である。
- ⑩ほとんどの生徒が新聞を読んで意見を表す経験をしたことがないので、朝のスピーチを毎日行っていく。各教科で新聞を扱うことも考えたい。

4 主な実践内容

(1) NIEコーナーの設置

毎日、新聞に触れる・見る・読むことによって新聞に慣れ親しんでもらおうと開始した。最初の1ヶ月は、各学年分のNIEコーナーを設置し、河北新報を2部ずつ用意した。教室移動の際に足を止めて読むなど、多くの生徒が有効利用できた。部数を確保する工夫によって継続していきたい。

10月以降は、生徒玄関前の1ヶ所に設置している。昼休みや下校前に読む生徒が多い。掲示された朝のスピーチを見る生徒も増えてきた。視覚的な工夫も考えながらNIEコーナーの充実を図りたい。



(2) 朝のスピーチ

朝の会を充実させることは学級づくりの1つのポイントである。この時間を使って新聞記事のスピーチと感想発表を行っている。中には、用語の意味や記事の背景を調べ、余白にびっしりと書く生徒もいる。生徒たちのスピーチは、理解が難しいロシア情勢から話題によく出る楽天の記事まで多様であり、興味津々に取り組んでいる。また、スピーチをする生徒だけではなく、その感想を発表する生徒にも表現力の向上が見られている。他の情報と関連させた意見や「もっと～すれば・・・」のような言い回しなど、成果を感じる場面が増えてきた。今後も楽しさを第一

に、5W1Hや展望を書くなどの約束事をおさえ活動を進めていきたい。

スピーチ発表後、担任の先生にコメントを書いてもらい、その日のうちにホールに掲示することになっている。これにより、学級によって活動内容に差があることも感じた。更なる共通理解を図り、活動を継続していきたい。



(3) 個人新聞づくり

修学旅行や農業体験などの社会体験学習を前に、新聞をつくるためのガイダンスを行った。「アタマ・カタ・ヘソ」、「5W1H」といった新聞記事の書き方やレイアウトの在り方、題字や見出しの付け方、字数制限の中でまとめる難しさなどを簡単に説明した。新聞づくりに入ってから毎時間繰り返し、意識させた。友人のつけた見出しに感動し、作成し直す生徒や「今年の新聞は大変でした」と今までとの違いに苦労した生徒も多かった。1学年では、〇〇先生賞というものを作り、その頑張りを労った。年に1度の新聞づくりだが、非常に充実した活動になった。

(4) ことばの貯金箱

新聞から切り取った言葉をキーワードに、1つの作品を完成させていく。指導者としては、単純な活動だからこそ発問が難しいと感じたが、生徒たちの反応は非常に良かった。作品は多様で、部活をテーマにしたもの、3つの異なる文に分けたもの、前向きな言葉をつなげてメッセージ化したものなど生徒たちの感性には驚かされた。

5 今後の課題

- ・NIE活動をより一層効果のあるものにするため教職員間の共通理解を図る。
- ・河北新報社による出前授業や社内見学など、新聞社と連携した企画を実践する。
- ・NIEコーナーの定期的な変化や先生による新聞記事の紹介、新聞部数の確保など、生徒が新聞を手取る回数を増やすための工夫を施す。

(担当 教諭 村檜 雅恵)

基礎学力の定着～新聞を活用した様々な表現活動を通して～

I はじめに

本校では、平成 26・27 年度の 2 年間、N I E 研究協力校・実践指定校として認定を受け、複数の新聞が無償で提供され、生徒が新聞に親しみ、教師が新聞を生きた教材として活用できる環境が整った。今年度は、英語科が中心となり、授業での実践を積み、また、総合的な学習の時間での活用を試みた。

II 本校の現状について

認定を受ける前から、教科・科目ではもちろん、学級活動・ホームルーム活動でも積極的に新聞を利用している。

図書館では、日刊紙と週刊英字新聞のコーナーを常設し、生徒はいつでも新聞が読める



図書館



学級新聞

環境にある。また、編集委員会では「学級新聞」を作成するなど、生徒が新聞に関わる機会が非常に多い。

III 教科・科目での取り組みについて

今年度は、5 年生を中心に英語の授業で英字新聞の活用を試みた。教科書の題材に関係する記事を読ませたり、ディバートのテーマとして活用することが多かったが、活動を通して気づいた点や生徒に好評だった活動を紹介したい。

1 新聞を活用する利点

生徒のモチベーションを高めるために、以下の 2 つの観点から新聞を活用することは非常に有効である。

①新鮮さ＝新しい情報

新聞には常に最新の記事が掲載され、生徒にもなじみ深いものが多い。普遍的なテーマを教科書で学ぶことも重要であるが、時事問題や生徒が関心を持つ話題を提供することで、生徒のモチベーションは必然的に高まる。

②手軽さ＝入手しやすい・加工しやすい

紙の新聞は、どこでも開くことができ、一覧性に

優れ、教師のセレンディピティを磨く訓練にもなる。一方、インターネットを使えばキーワードで検索できるので、ピンポイントで使いたい記事を手に入る。また、加工もしやすいので、授業形態に合わせて変化させることができる。紙媒体と電子媒体はケースバイケースで使い分けていくことが求められる。

2 新聞の活用事例

(1) 記事を使ったアクティビティー

今年度は、英字新聞に掲載されたやや易しい記事を読むことに挑戦した。ペア活動やゲーム的要素を取り入れる等の工夫も行った。

<活動①>

・記事を配布し、以下のような「問」を解かせる。

問 1 : 「文の数を数えなさい」

問 2 : 「B ではじまる全ての単語をマークしなさい」

問 3 : 「一番長い単語をマークしなさい」

問 4 : 「全ての形容詞をマークしなさい」

問 5 : 「黒板に書かれた単語をマークしなさい」

・活動のポイントは、ゲーム的要素を取り入れることである。英語が苦手な生徒でも、問 1～問 3 には参加できる。また、ペアで取り組むので、どちらが先に探せるかという競争心をかき立てることもできる。

<活動②>

・記事を配布し、その下にある「問」の「答」となる英文に下線を引かせる。次に、読んだ感想を英語で書かせる。その後グループを作り、自分の感想を読み上げ、他人の意見を聞き取る。

・ポイントは、「答えの部分に線を引かせる」ところである。答えを英文で書くというのはややハードルが高い。線を引くというのであればやりやすい。また、自分の意見を書かせるという活動も重要である。読んだ感想を誰かに伝えることではじめてコミュニケーションが始まるのである。いきなり書かせるのが難しい場合は、以下のような型を与えて書かせるといい。

問の例

・「○○はいつ起こりましたか？」【時間】

・「○○はどこで起こりましたか？」【場所】

・「△△はなぜ起こりましたか？」【理由】
感想を書かせるための文例

I feel (感情を表す形容詞), because (文で書きま
しょう!).

(2) 「新聞コンクール」への応募

普段から、本文や段落の要点をまとめ、自分の感想を自由に言わせる(書かせる)活動をしているので、その流れが活かせるコンクールに参加させた。日本語と英語の違いはあるが、やることは全く同じなので、生徒は苦勞することなく取り組めた。自分で読みたい記事を選ぶことで、書こうという気分も高まり、理解が深まる。さらに、コンクールなので、外部の人間に評価してもらうことは、生徒には励みとなる。入賞はできなかったが、参加することに意義がある活動である。

(3) 「かほくワークシート」の活用

「かほくワークシート」は河北新報の記事を使った学習用のワークシートで、毎週月曜日の朝刊「かほピョンNIEのページ」に連載されている。PDFデータはA4判に印刷できるので、そのまま印刷して、授業の最初の5~10分でウォーミングアップとして、また、ワンショットの活動として利用した。毎週いろいろな記事を使ったワークシートがアップされ、英語の授業で使えるワークシートも多いので非常に役立っている。

ウェブページ

<http://www.kahoku.co.jp/special/worksheet/index.html>

IV 学年での取り組みについて

4年生の総合的な学習の時間では、小論文指導の一環として新聞記事を活用した取り組みを行った。実は、前年度に実施されたものをそのまま継承したものであるが、今年度も生徒には大好評であった。

1 これまでの経緯

最近、大学入試で小論文を課すところが増えており、その原典として新聞記事を使用しているところが多い。小論文を書くに当たっては、新聞の社説や記事を読み、まとめ、意見を書き、誰かに読んでもらうことが最善の練習法であるといわれている。そんなことから、言葉を扱うプロから講話をいただき、実際に新聞を使った活動を行うことで、生徒は新聞を読むことの大切さを認識し、楽しく学べるコツもつかんだようだ。

①講演会

2学期が始まってすぐの9月に、「なぜ新聞を読むのか〜新聞を読み、活かすために」と題して、河北新報社教育プロジェクト事務局長の砂金慎氏

に、4年生対象にご講演をお願いした。生徒は、現場を経験した専門家からの話に興味津々で、新聞の読み方を学び、同時に新聞を読む重要性を再認識していた。

②読売ワークシート通信

講演会の翌週に実際に新聞記事を使った「見出しをつけよう」という活動を行った。まずは記事を読み、内容をまとめ、人と意見を交わし、自分の考えを深めた。今回は、「読売ワークシート通信」=写真=を使用した。各新聞社が、NIE活動をサポートするウェブサイトを提供しているため、それを最大限に利用していくことで、教師側の負担もある程度軽くなるであろう。

③ことばの貯金箱

NIE教育コンサルタントで白鷗大講師の渡辺裕子さんが考案したワークシ
ョップで、新聞の記事
や広告の中



「ことばの貯金箱」生徒の作品

から気に入った言葉を切り抜いて台紙に貼り、自由に字や絵を描き加えたりしてまとめる「ことばの貯金箱」を行った。最後には、それを使って自分の考えや意見を発表させた。この活動は、読みながら切り取り、レイアウトを考え、文字やイラストを描き加えるという、実はとてもクリエイティブな活動である。

V 成果と課題

1年目ということで、今年度は5年生の英語の授業と4年生の総合的な学習の時間を中心に、できる範囲で実践を行ってきた。今年度の英語科の目標である「様々な表現活動を通して」は達成できたと考える。今後の課題としては、全ての学年で体系化できるか、他教科との連携はいかに図っていくかが挙げられる。また、総合的な学習の時間のような教科・科目以外での活用法も検討していく必要があると考える。

(担当 教諭 大槻 欣史)

新聞記事を教材として使った教科指導

～考察力・読み取り力・表現力を養う～

1 はじめに

本校は今年度創立 40 周年を迎える普通高校である。しかし、平成 23 年に発生した東日本大震災を機に、平成 28 年 4 月より「災害科学科」を新設し、防災教育のフロンティア校の役割を担うことになった。今年度 N I E 協力校として取り組むことになったのは、将来的に新聞を使った防災教育に向けての方策を探るとともに、まずは様々な教科・科目において新聞を教材として使用して、その素地を整えたいと考えたからである。

2 生徒の新聞に対する環境・意識

N I E に取り組むに当たり、生徒の新聞に対する環境、関わり、意識を調査した。

Q 自宅では新聞を購読しているか？

はい 74% いいえ 16%

Q あなたは新聞を読みますか？

はい 20% いいえ 47% ときどき 33%

Q どんな記事を読むか？

ほとんど全て 15% 第 1 面 16%

国際 6% 経済 5% スポーツ 67%

地方 23% 文化 6% 漫画 4% 広告 5%

Q 「いいえ」の方。なぜ読まないか？

面倒くさい 34% 難しい 3%

時間がない 32% 自宅で取ってない 24%

スマホ・パソコンがあるから 12%

Q 授業で新聞を使うことに対してどう思うか？

興味・関心がわく 46%

授業の内容がより理解できる 49%

面倒に感じる 5%

という結果が得られた。自宅では新聞を購読してはいるものの、「読みますか」に対して「はい」の割合は 5 人に 1 人と非常に少なかった。また、新聞を読まない生徒は、スマホやパソコンでニュース記事を読んでいるのかと思ったが、既読率は 12% という結果から、全体の 6 割から 7 割の生徒はニュースそのものに興味がない結果となっている。新聞記事、ニュースに興味・関心を持たせるために、学校でも方策

を練る必要があると考える。

3 各教科での取り組み

【保健体育科 (保健)】

厚労省はじめ諸機関からの健康問題に関する最新の情報を取り入れたり、健康や医療、環境などに関する記事を使い考察させるのに用いている。教科書に掲載されているデータは数年前のものになっているので、新聞に掲載されている最新のデータは有効に活用できた。とくに、福島第一原発の放射能汚染問題に関しては、新聞による詳細なデータや記事は環境問題を扱う中で非常に有用な資料になった。また、この原発事故と私たちはどう向き合うのか、生徒に考察させるための教材として大いに役立った。



さらに、高齢社会を迎え様々な問題を抱える中、タイムリーなニュースや話題をすぐに教材として使用できたことは、生徒にとっての理解度を高めることにつながった。写真の教材は、実際の記事を使い生徒に考察させたものである。

冒頭のアンケート結果にもあるように新聞を教材に使うことで「興味関心がわく」「理解度が増す」と答えている生徒が多数を占めることから、今後も内容に即した記事を効果的に使用したいと考えている。



【地理歴史科（地理）】

自然災害や民族問題を授業で扱う際に新聞を活用することが多い。たとえば、自然災害について学ぶ際に、広島土砂災害や御嶽山の噴火などインパクトのある写真を見ながら記事を読んだり、フィリピン台風の被害について1週間分の新聞を何人かで一緒に読みながら被害状況を調べるグループワークを行った。授業で新聞を読んだ後に、自宅で新聞やニュースを見る機会が増えた生徒や、JICAの国際協力プログラムに参加し、フィリピンの方や他校の生徒と自然災害について学び合う生徒がみられた。

民族問題について学んだ際には、イスラム国の拡大やパレスチナ問題について記事を読ませ、宗教や民族の違いから起きる対立について改めて考えさせた。生徒は民族や宗教に疎く、民族問題に対してどうしても他人事ととらえがちである。記事を読み、世界で起きていることを少しでも知ることによって国際協力に興味を持ち、JICAの国際協力プログラムに参加する生徒がみられた。

新聞は、自分たちが生きている世界で何が起きているのか知り、世の中のことに無頓着にならないために必要な要素がたくさん詰まっている。まずは授業の中で生徒が新聞に触れる機会をもっと増やしていきたいと思う。

【国語科】

新しい学習指導要領に移行し、「国語総合」は、二年目を迎えた。「話すこと」・「聞くこと」・「書くこと」を総括的に考えたときに、新聞を教材として利用することは、多くの言語活動を複合的に達成できるものであり、今後ますます利用頻度が上がっていく可能性を持つものであるといえる。

本校においては、一年次の総合学習の中で設定された「小論文の執筆」を国語科の領域で一部補填することで、具体的な言語活動を実践することとした。まず、長期休業中の課題として、小論文を書くための材料集めを行うという学習活動を指定した。これは、新聞記事を適宜選び、その記事に関する意見や感想、問題解決と言った項目を文章化させるという取り組みである。また、その際に闇雲に新聞記事を選ばせると、比較的興味関心の高い分野に嗜好が偏るという懸念もあり、題材をいくつかの大テーマに絞り、こちらから指定した。そのことによって、普段あまり考えることのないような問題について、多くの記事を利用する様子が見られた。

そもそも、小論文を執筆するためには、さまざまな知識や情報が必要であり、その材料集めを主体的に

行うには、メディアの力は欠かせないといえる。今回、新聞記事に限定して材料集めに取り組ませたが、実情はそれだけでは飽き足らず、過去の記事をウェブから調べ上げて、多角的に取り組んできた生徒もいた。このように考え方が深化できるのも、メディアの多様化という特性の一端ともいえる。

さて、このような取り組みを通して真の課題解決能力が簡単に形成できるとは思わないが、さまざまな角度から物事を見通し、自分の意見や考え方を客観視するという取り組みは、今後も継続していくべきであり、生徒の実態に合わせた方法を今後も模索していくべきであると考えている。



4 まとめ

この1年間は新聞を授業の中でどのように活用することができるかについて考えてきた。さまざまなメディアによって大量の情報をもたらされる現代社会において、印刷メディアとしての新聞の特性を活かし、情報を読み取る力、自らの考えを文字としてまとめ伝える力の育成に資するものがあつたと考える。また、新聞の持つ資料的価値や情報の多面性などについても考察させることができた。こうした学習活動に継続的に取り組むことに加え、次年度、本校は冒頭に掲げたように、全国2番目となる防災系学科である「災害科学科」の設置を翌年に控えることになる。新聞は災害時に生きるために不可欠な情報入手する手段であることを認識させることは論を待たなくてもないが、「阪神淡路大震災」・「東日本大震災」をはじめとする過去の災害や、世界の災害をどのように伝え、どのように記録してきたかを考察し、防災・減災教育に活用する方策や、防災・減災のために、自らの持つ情報をいかに伝えることができるかを探る必要性が問われることとなる。

(担当 教諭 桜井 直至)

2 部会活動研究実践報告

(1) 宮城県NIE推進委員会・小学校部会

平成 26 年度小学校部会の活動を振り返って

仙台市立泉松陵小学校 教諭 阿部 謙

1. 第 1 回小学校部会役員会

平成 26 年 5 月 9 日 (金)
於：河北新報社
参加者：4 名

- ・今年度の活動計画
- ・役員選出
- ・出前授業の計画



NIE アドバイザーが、
出前授業へ向けて、
5 年国語
「新聞記事を読み比べよう」
師範授業の実施を決定。



②

平成 26 年 6 月 30 日 (月)
授業者：七北田小学校
今藤正彦 教諭
参加者：県内NIE運営委員 11 名

2. NIE 師範授業

【授業】第 5 学年国語

「新聞記事を読み比べよう」

『新聞の読み方』

～大人はなぜ新聞を読むのか～

- 提案① 教科書題材での NIE 実践
提案② 一般紙を一人 1 部持たせる授業
提案③ NIE を取り入れた指導計画



①

平成 26 年 6 月 24 日 (火)
授業者：泉松陵小学校
阿部 謙
参加者：県内NIE運営委員 7 名



3. 第1回小学校部会

平成26年7月7日(月)
於：河北新報社
参加者：15名

- ・今年度の活動計画
- ・役員選出
- ・師範授業の報告

4. 第2回小学校部会

平成27年1～2月 実施予定
於：河北新報社

- ・出前授業へ向けた振り返り
- ・来年度の方向性
- ・カリキュラムづくり

NIE出前授業計画について

目的

出前授業を実施することにより、NIEの県内への普及、NIE実践者の拡大を図る。

方法

【平成25年度】

出前授業へ向けた提案授業

【授業】第5学年国語

「新聞記事を読み比べよう」

授業者 郡山小学校 校長 相澤経利

【平成26年度】

NIEアドバイザーによる示範授業

- NIEアドバイザーによる師範授業の実施
- ・NIEアドバイザー2名が、自校において師範授業を行う。
- ・運営委員が分かれて参観し27年度実践に向けて

検討を行う。

【平成27年度】

運営委員による自校での出前授業

- ・運営委員が自校で師範授業を実施
- ・近隣校へ参観を呼びかける。

【平成28年度】

出前授業 実施

- ・県内から希望校を募り、出前授業を本格的に実施する。

NIEの飛躍的
普及・発展を
目指して

今後の構想として・・・

①NIEを取り入れた国語科出前授業の指導計画づくり

4年「わたしが選んだ今月のニュース」

4年「みんなで新聞をつくろう」

5年「メモを使って題材をさがそう」

6年「わたしの意見を書こう」

6年「新聞の投書を読み比べよう」

6年「ふるさとの良さを紹介しよう」

- ・指導計画
- ・指導案
- ・新聞資料(記事)
- ・ワークシート

②その他の出前授業のメニューづくり

出前授業の例

- ・新聞づくり
- ・新聞社で働く人
- ・新聞はどのようにつくられているの？
- ・新聞記事の書き方
- ・見出しの付け方 等

平成 26 年度中学校部会報告

仙台市立八木山中学校 教諭 石井 宜

1 八木山中学校 2 学年の実践について

本校の2学年では、総合的な学習の時間（以下、総合）や朝の活動の時間（原則は朝読書をする時間だが、考査前は学習の時間にあてたり、学年裁量で使ったりしても良い時間。以下、朝活）で、新聞記事や投書などをもとに自分自身の生き方や身近な問題（特に「働く」ということや労働者に関する問題）について考えさせる学習に力を入れている。

また、社会の授業でも、地理の授業の資料として活用したり、宿題で自分の意見を書く材料にさせたりしている。

その他、「なぜ、勉強するのか」というテーマについて考えさせたり、スマホ・携帯について指導したりするのも新聞記事などを活用している。

生徒たちの感想などは、できるだけ2学年通信（以下、通信）で紹介し、それを読ませることで自分の考えが揺さぶられたり、さらに考えを深めたりできるようにしている。

2 総合的な学習の時間や朝の活動の時間では

(1) まず手始めに

① 4/24・5/1 朝活

両日とも河北新報（以下、河北）に寄せられた14～16歳の若者の投書を3つずつ（4/24は身近な人への親切心掛ける・モラルの低下若者注意を・相手の心優しい行動を、5/1は食物への感謝震災で深まる・生活の便利さ考える機会を・地元栗原の夜「暗さ」に安心）読ませて、原則としてどれか1つずつ選ばせて感想を書かせた。そして、生徒が書いた感想は、各投書について2～3人ずつ通信第11号で紹介した。

② 5/30 朝活

読売ワークシート通信（以下、読売通信）の5/21発行の「オトナは18歳から？」をもとにこの問いかけに対する考えなどを書かせ、通信第26号で「18歳から大人」「20歳から大人」「どちらとも言えない」それぞれの立場から2人ずつの考えを紹介した。

(2) 特に「働く」ということや労働者に関する問題

について

① 6/10 総合

宮城県では新規高卒者の離職率が高いことや、その一番の理由が「職場の人間関係」にあることなどを取り上げた読売新聞（以下、読売）と河北の記事をもとに資料の読み取りをさせたり、感想を書かせたりした。感想については、次の②と合わせて通信第30号で紹介した。

② 6/26 朝活

河北への2通の投書（介護職の息子悩みつつ3年、仕事は継続が大切3年たてば自信に）を読ませて、仕事や8月に行われる職場体験学習への心構えなどについて考えさせ、感想を書かせた。

③ 12/12 総合

読売の「社会保障のは・て・な Q労働時間に決まりは」と「働く法律のきほん 10」、朝日新聞の「有給休暇非正社員にも権利」をもと資料にの読み取りをさせ、労働法の内容について学習させた。

3 社会科（地理的分野）の授業で

(1) 2 節人口の特色では

この小單元では、9つの記事やコラムなどを利用した。特に「福島除く東北5県137市町村『消滅可能性』』という河北の記事に驚いた生徒が多かった。

(2) 秋休みの課題（「原子力発電について、自分の考えを持とう」）の資料として

賛成派・反対派の意見やその根拠となる資料などをプリント集にして配付した。今全部を読みこなせなくても、今後考える上での資料にしてほしいと考え、生徒たちにもその旨を伝えた。

4 「なぜ、勉強するのか？」

12月の5回の朝活を使って、河北と読売の読者相談欄や河北への投書をもとに、このテーマについて幅広く考えさせた。特に読者相談欄に寄せられた学習についての相談は、自分が回答者になったもりで回答を書く形をとったので、生徒たちは特に意欲的に取り組んだ。この回答や感想などは、通信56～59号で紹介した。

平成 26 年度高等学校部会報告

宮城県水産高等学校 教諭 平居 高志

今年度の実践指定校として、東北学院高校（2年目）、多賀城高校（1年目）が認められ、N I Eの実践に取り組んでいる。しかし、それは各校独自の取り組みであり、高等学校部会としての活動はないのが実情である。そこで、N I E推進委員会に関わる一高校教員として、N I Eがどうあるべきかについて愚見を述べ、今年度の報告に代えることをお許しいただきたい。

私がN I E推進委員会に関わるようになって3年が過ぎた。この間、福井で行われた全国大会を始め、県内の研究大会、実践発表会などの会に参加し、他県も含めた実践報告書を読むことで、N I Eのあり方や可能性について新しい知見を得たことは、私自身にとっては大きな収穫だった。

一方、各校の意欲的な取り組みを見ながら、それが立派な取り組みであるだけに、その水準で継続的に実践を重ねていくことは難しいと感じ、知れば知るほどN I Eが敷居の高い活動に思われてきた。

だが、私自身、あるいは私の周囲を見回す限り、新聞を教育活動に取り入れることについては、ホームルームや授業のネタ（話のきっかけ、教科書の現実への当てはめ、学習内容の拡張）として、かなり一般的に行われているのではないかと思う。その多くは、新聞記事をプリントして配り、ひととおりを通すだけであったり、教員がそれについてコメントしたり、生徒とともに若干の意見交換をしたり、といったことではないかと思う。

そのような実践は、日常生活上のあたり前のメディアとして新聞を位置付け、情報収集と思考に役立てていく重要な実践であると思われるが、いざ「研究発表」となると、それでは済まないという気になることは理解できる。

つまり、現在の「N I E」は新聞が主役になっているが、「N I E」を意識しない多くの人々の実践は、新聞を補助的手段として位置付けているという、ねじれた状況が存在するのである。

後者のような人々にとって、N I E推進委員会を中心とする活動は無用の長物であろう。では、組織的

にN I Eを推進することは、必要ないであろうか。自分たちの存在価値を自ら否定することに対するためらい、というだけではなく、私は必ずしもそうではないと思っている。

なぜなら、新聞離れ、活字離れが語られることの多い今日、私の漠然とした実感によれば、教員でさえも、そのことから無縁であるとは必ずしも言えないからである。意欲的に新聞を教育実践に取り入れている人たちがたくさんいる一方で、新聞を手にすることもほとんど無くなってしまった教員は、徐々に増えているのではないだろうか。しかし、画面を通過してゆく影像に頼って情報を得るだけでは、地に足の付いた思考力と批判力は育たない。

だとすれば、新聞というメディアの価値を問い直し、それを絶えず意識的に発信していくことは、どうしても必要なことであると思われる。私がN I Eを組織的に行うことに価値を認めるのは、その点においてである。

だが、少なくとも高校において、N I Eは広く一般教職員に知られ、関心を持って見つめられているとは言いがたい。それは、広報活動のまずさによるかも知れないし、前述のような先進的实践と日常的実践との方向的なずれや、何らかの理由に基づく敷居の高さによるかも知れない。

そもそも、N I E推進委員会の活動は何を目的とするのか。新聞を補助的手段とする人々にとっても、価値のある組織的活動とはどのようなものか。そんなことを考えながら、今後の活動を模索していく必要があるように思う。

3 大学からの報告

大学とNIE

NIE教育コンサルタント 東北福祉大学 渡辺 裕子

1 NIEの授業が開設されて5年

東北福祉大学には、NIEの授業がある。平成22年4月に開設されてから丸5年になる。教員を目指す学生を対象にして行われる授業である。

前期は、NIEの理論を中心に「NIE活動論」を、後期は、NIEの実践に重きを置いた「NIE活動実践」を、通年で学んでいく。大学のNIEはまだまだ歴史が浅い。そのため、本学のように、通年でNIEの授業を開設している大学は、全国的に見てもあまり例がない。もちろん、県内では本学以外にはない。しかも、「理論」と「実践」の通年授業となると、オムニバス形式がとられるケースが多いが、本学では最初から最後まで一人で担当している。

2 NIEの基礎を学ぶ授業

「NIE活動論」では、「新聞を読める学生の育成」を念頭に置きながら、まずは「新聞の読み解き方」からはじめていく。「NIEとは何か」「NIEの歴史」「NIEにおけるメディアリテラシー」「教育現場での新聞活用の意義」など、NIEの基礎知識を学んでいく。前期の終わりには、過去の実践例を通して、簡単な「NIEの学習指導案」について学び、模擬授業も行う。

後期の「NIE活動実践」では、前期の内容を土台にして、例えば「ことばの貯金箱」や「NIEの学習指導案」「模擬授業」などを、実践的に学んでいく。

3 大学生もまずは、スクラップ活動から

毎年、最初の授業時に「普段、新聞を読んでいるかどうか」を聞いてみるが、ほとんどの学生から「読んでいない」「たまにしか読まない」という答えが返ってくる。そこで学生たちには、新聞を読む習慣を身に付けてもらうために、まずは「記事のスクラップノート」を課題にしている。

興味関心を持った記事を、大学ノートの左に貼り、右には「読んでわかったこと」と「読んで思ったこと」をまとめる、という一般的なやり方だ。さすがに毎日ではハードルが高いため、週1回の課題としている。

最初のうちは、社会面やスポーツ欄など、取り上げる記事は様々だが、授業が進むにつれて、いつしか将来を見据えた「教育関連」の記事が目に行くようになる。

「この記事を使ったら、どんな授業ができるか」「この記事でこんな授業をしてみたい」などと、発展的に捉えることができるようになっていくのだ。

今まで、新聞を読んでなかった学生たちにとって、この課題は容易なことではなく、慣れるまで結構時間はかかるが、回を重ねるにつれ、着実に読む力や書く力がついていく。授業も終盤になるころには「新聞を読むようになった。これからも読んでいきたい」と姿勢が変わっていく。新聞を読まない教員も増えている中で、将来教員になるであろう学生たちのこの一言は、とても心強い。

4 まずは、新聞をゆっくり広げてから

さて、毎回の授業だが、その日の朝刊（河北新報、毎日新聞、読売新聞、朝日新聞が人数分届く）を、ゆっくりと広げて読むところから授業は始まる。学生一人一人が好きな新聞を手にして思い思いに、読み始めるのだ。なんとも、ゆったりとした静かな時間が流れる。一通り目を通すと、記事を話題にしながらのおしゃべりが始まる。気に入った記事を互いに紹介し合う場面だ。授業は、前期と後期それぞれ16回で構成されている。授業の一部の「学習指導案作成」と「模擬授業体験」の内容を簡単に紹介しよう。

「学習指導案作成」の授業では、おもに小学校の国語や道徳について行っている。この授業では、それぞれが「授業で使いたい記事」を選んで指導案を作っていく。「授業の流れ」「板書計画」「ワークシートづくり」、その他の「教材制作」までを一通り行う。その後、2つの班に分かれて、それぞれが作った指導案を持ち寄り、発表し合い、意見交換をしていく。さらに、模擬授業をどの指導案で行うかを話し合い、決める。そして模擬授業へと持っていく。「模擬授業」では、教師役などの役割分担を班ごとに決めていく。授業は、本番さながらに進めるが、授業時間は40分とする。

授業後は、発問、資料の提示、板書、教師の動き（目線、声、表情など）、時間配分などについて、教師役、児童役として感じたことをそれぞれが意見交換していく。いわゆる「授業検討会」だが、なかなか活気あるやり取りが交わされる。

5 授業の感想（抜粋）

①N I Eの授業を受けて「この授業に出会えて本当に良かった」と心から思います。この授業があることは2年生の時から知り、興味を持っていました。この授業のおかげで、普段読んでなかった新聞を、興味関心をもって読むようになり、自分の考えを持てるようにもなりました。

②この授業を受けるようになって、以前よりも社会のニュースに関心をもつようになりました。特に、教育に関する記事に目を凝らすようになりました。

③私は今まで「新聞＝難しい」というイメージを持っていました。なぜなら、難しい言葉がたくさんあるうえに、文字がびっしりと載っていて、読むには時間がかかりそうで、面倒だと思っていたからです。しかし、この授業を受けて「新聞＝面白い」というイメージが変わっていきました。授業で新聞を使う場合は、記事を通して、子どもに何を学ばせたいのか、何を伝えたいのかを考えて作成することが、大切だと分かりました。

「書き手のメッセージを読み取る」「記事の読み比べをする」「写真を読み取る」など、新聞記事一つで、様々な角度からの学習が可能であることも分かりました。

今までは「新聞を使った学習は高学年でからでないと難しいのではないか」と思っていたのですが、低学年からでも、教師の工夫によって可能であることも分かりました。私が教員になったら、是非、新聞を使った授業を実践したいと思います。そのためにも、私自身がもっと新聞を読み、新聞の良さを知っていききたいと思います。

6 大学のN I Eは急務の課題

新学習指導要領の中には、新聞を活用する項目が各教科に盛り込まれている。例えば、小学校4. 5. 6年生の国語では、「新聞の読み比べ」「新聞の作り方」など新聞についての具体的な項目がかなり入っている。大学でN I Eをしっかりと勉強していかなければ、あるいは現職の先生方もN I Eを知らなければ、なかなかその指導は難しい。現に、教育現場の

先生方からは「新聞は難しい。児童（生徒）に新聞について教えてほしい」との声が、あちこちから上がっている。

河北新報社など、各新聞社ではそれらの声に応えて、「出前授業」を行っている。もちろん、「プロの話を出前授業で聞く」という授業も必要なことではあるが、それだけでは授業は成り立たない。新学習指導要領に沿って「新聞」を教えるには、まずもって教師自らがそのための知識を身につけていかなければならない。

教育現場でのN I Eの認知度は、まだまだ低い。教員向けの「N I E研修会」を設けるなど、学べる環境づくりが急務である。もちろん、大学でも早急に、教員養成課程の段階から、カリキュラムの中にN I Eを取り入れる必要がある。

しかし、大学でのN I Eは遅れている。とりわけ、教員養成課程でN I Eの授業を取り入れている例は、ごく稀である。その対応が急がれる。

今年の4月から、晴れて教員になる学生が「N I Eの授業を早くやってみたい」「子供たちにN I Eのすばらしさや、重要性を伝えていきたい」と語り、「N I Eの授業をやるときは、見に来てください！」とも、語ってくれた。なんとも嬉しい限りだ。

「小さなN I Eの種が、それぞれの赴任地で、たくましく大きく成長していきますように」と、願わずにはいられない。



ことばの貯金箱「写真グッ（GOOD）と賞」、最優秀賞に輝いた坂本秀明さん（河北新報写真部カメラマン）をお招きしてご講話を頂きました（2014.5.15東北福祉大学にて）